茶湯の茶碗打割りし報ひ有り、慎めとの物語、今思ひ合すれば、こなさんの此商賣を、打破つて身を果す。茶湯の茶碗打割りし、因果が廻り來ました」と、又伏沈み泣居たり。

【註】○勤の者―廓勤をしたもの、浮氣なものゝ意。○叶はぬ事…仕方のないことはどうにもならぬ。○銀の瀬戸―金工夫の難關。○しだら―有樣。ていたらく。○逆罰―神佛の助けを受けず却つて罰を受ける意。○三世相―佛の因緣說に占の法を加へ、更に五行即ち木火土金水生剋の理をまじへ、生年、生月、八相によりて、過去現在來來因果善惡を說くをいふ。

【譯】嘉平次は表の方に氣をつけて「さあ向ひの家の門もしめられた。是までは骨が折れたが、今となつては何の障りになるものもない。二人が斯くの如く並んで差向へば夫婦暮しも同じことぢや。これ、此家がお前の家ぢやぞ。ゑゝ口惜しい。世間に對して何の憚る處なく此家へ呼入れ、親にもあはせ、町の人にも廣めをし、お前に世帶の始末をまかせ、商賣を手廣くし、嘉平次の女房は、廓勤めをしたやうな浮氣な風は少しもない。どんな大世帶でも立派に始末の出來ぬとも限らぬ女房ぢやと、世間にいはせてやらうと思ふたに、仕方のないことは仕方がない。又僅か一貫目餘りの金の工夫が出來かねて、憂い辛い評判を得て死ぬことは無念ぢやわい」といつて齒ぎしみをなし、頭も上げないで泣くと、さがは「本にさうぢや、わたしとても、せめて一日でも父御樣につかへ、姉御樣を姑御としておつかへしたいものと、明暮れ願つてをつたが、それも叶はぬばかりか、此ざまである。これも願ふべきでない願をして罰があたつたのか。其以前、ある人に、三世相を見て貰つた處、前世に佛前で茶湯の茶碗を割つた報を受けることになつてゐるから慎めといふ話であつたが、今思ひ合せると、お前の此商賣を打こはして死ぬことになる。つまり茶湯の茶碗を打割つた因果が巡つて來たのぢや」といつて打伏せて泣いてゐた。

嘉「かう成身の三世相、ろくな事が有物か。夜半も過たいざおじや」と既に出んとする所へ、「嘉平次用が有るこゝ明い」と門たゝく。「誰じや夜更てやかましい。用があらば其處からいへ」「たわけ者親の聲を知らぬか。五兵衞じや明けい」「はつ」といふより仰顚し、たつた一間の濱納屋を、さがが素振も見せ共なし、何處に隱さん道成寺の、鐘はなけれど即座の智慧 窓の貫に帶をきつと結び下げ、「サア取付いてぶら下れ」と、共に手をかけ筒井筒、井筒にあらぬ釣瓶下し、干潟の沼を踏む足も、淵に沈むが如くなり。左あらぬ顏にて、嘉「只今臥せる折から、何事の御用がな」と、門の戸明くれば、親五兵衞常に數寄の大脇差、「遠慮せずに此方おじや」と、手を引入るは養ひ嫁のおきは。思ひがけなき嘉平次、「こりや何事が起つた。さがが嘸悲しかろ、」と挨拶も何するやら、聲も上洩る計りなり。

【註】○仰顚―仰天。○濱納屋―大坂では川岸を濱といふ、川岸にたてた小屋を濱納屋といつた。嘉平次の出店をさす。○道成寺―安珍清姫の故事を引いて、所作事道成寺では、清姫に追かけられた安珍が、鐘の中に隱れることになつてゐるが、此處では身を隱すべき鐘はないがの意。道成寺は、身を隱さう、どうしようにかく。○共に手をかけ―嘉平次が、帶にとりついてぶら下れといつて、互にその帶に手をかけ合ふて。○筒井筒……筒井は、圓い井戸。圓井戸の筒を筒井筒といふ。此處は筒井を下る釣瓶ではないが、さながら釣瓶を下ろす如く下りての意。かけつゝにかく。○數寄―好みの。○上洩る―うはづる、高く調子が外れる。

【譯】嘉平次は「かういふ風になる三世相ぢや、ろくなことがあるものか。もう夜半も過ぎた、行かう」といつて最早出かけようとす　所へ、「嘉平次用がある此處をあけろ」といつて門をたゝくものあがる。嘉平次は「誰ぢや、夜がふけてから喧しい聲を立てる。用事があるならそこからいつたがよい」といふ。「たはけ者奴、親の聲が分らぬか、親五兵衞ぢや、「明けろ」といふと「はつ」といふよりも驚いて、只一間の濱納屋の事とて、仕方なくさがの樣子も見せ度くもなし、といつて何處にどうしよう、身を隱させう鐘はないが、即座の智惠をしぼつて、窓にある貫板に帶をきつと結へてさげ、「さあ、これにとりついてぶら下れ」といつて、一緒に手をかけ、井筒を下る釣瓶ではないが

釣瓶を落すやうに下ろされて、干潟になつてゐる沼をふむ足は、地獄の淵にでも沈むやうである。やがて嘉平次は何事もない顔附にて「只今丁度寢た處ぢやが、何の御用がありますか」といつて門の戸をあけると、親五兵衛は、いつもの好みの大脇差をさし「遠慮せずと此方へ來い」といつて、養ひ嫁のおきはの手を引いて入れた。思ひがけぬ樣子を見ると、嘉平次は「これは何事が起つたやら、これを見たらさがは嘸悲しいことだらう」と思ふと、挨拶も何をするやら分らず、聲も上がつて調子外れな樣である。

おきはは道々泣いたる顔、親も涙を目に一ぱい、五「ヤイうつけめ、をのれ商人の又しては〳〵、見世を明けて余所歩き、晦日前物際は、武士の軍の虎口ぞい。跡の廿八日より出見世を出、朔日は天滿に て阿房を暴し、大事の五月の節季を捨、今日迄は何處に居た。たつた今家主より知らされし、清水燒の仕舞物買ひに、京へ上つて今朝歸り、親仁も機嫌がよいとは、五日にも十日にも、親に顔を何時見せた。さがとやらが顔さへ見れば、親の顔も兄弟の顔も、をのれは見たふ有るまい。鹽町の姉が禮に來て、親子兄弟菖蒲の盃する迚、今日の節句は嘉平次の顔が見へぬと、うぬが事悔んで可愛や泣いて歸つた。去りながら、こりや此おきはが顔ばかつかりは、否でも應でも一期見せねば叶はぬ」と、

【註】○うつけ奴―阿呆奴。○物際―節季、節句などの間近。○武士の軍の虎口―武士でいはゞ、軍の勝敗の時の意、虎口をその頃虎ぐちと讀んだと見えて原文はかなでぐちとある。○五月の節季―端午　○禮に來て―祝のあいさつに來たのだ。○菖蒲の盃―端午の祝の宴　○否でも應でも―何としてもの意。○一期―一生涯。

【譯】おきはは道々泣いた顔をしてをり、親も涙を目に一ぱい浮べて「やいこの馬鹿な奴、おのれは商人でありながら、又々店をあけて、他所歩きをしてる。晦日前とか節季間近は、武士でいへば軍の勝敗の分れるといふ危ない所だぞ、それを前月の二十八日から出店を飛出して、朔日には天滿で阿呆らしい樣をやり、大切な五月の端午の節季を打すてゝ、今日まで一體何處にゐたのぢや。只今家主から知らせて來て知つたが、清水燒の拂物を買ふ爲に、京へ上つて今朝歸り親父も機嫌がよいとは何のことぢや。五日や十日の間に何時親に顔を見せた。さがとやらが顔さへ見て居れば親の顔も兄弟の顔もおのれは見たくはあるまい。鹽町の姉が端午の挨拶に來て、親子兄弟揃つて節句の祝の盃をするとて宴を聞いたか、今日の節句は嘉平次の顔が見えぬといつて、おのれがことを殘念がつて、可愛さうに泣いて歸つた。でも此おきはが顔丈けは、何といつても、一生見せないでは承知ならぬ」と――

いへばおきはは わつと泣き、「エヽ情ない嘉平次樣。嫌な物私が無理に添はふといふにこそ。お前の心が不定で、外を家になさるゝゆへ、親仁樣の御苦勞、一ッ屋の家も立ませぬ。心さへすはつて家を踏へる覺悟なら、おさが樣を呼入れて、兎角お身の立樣に、わしや在所へ戻つて尼に成共成ますする」と、道を正して泣きければ、さがは聞くより氣も亂れ、「いとしやあのお人も、心の内は妬ましかろ。わしが離るゝこともいや。父御のも尤なり。エヽ死にやうが遲かつた。今鹽がさいて來て、此身を取つても往けかし」と、身を悶へてあこがるゝ。嘉平次は「只何事も親の慈悲、御免」とよりは一言も、泣いて俯伏く計なり。

【註】○添はふといふにこそ―反語的表白法で、添はふとはいひはせぬ。○一つ家―親父の家のある處。○父御のも―父のいふことも。○親の慈悲―慈悲にて御免下され。○一言もないて―一言もなく、泣いての意。

【譯】 いへばおきははわつと泣き聲をあげて「ゑゝ情けない。嘉平次様、お嫌なものを無理に夫婦にならうと誰が中しませう。お前の心が定まらず、家を家とせず、外を家となさるから、親父様の御苦勞があり、一ツ屋の家も立つてゆきませぬ。お前が心をすえて、ちやんと家をふみこたへてゆく覺悟ならば、おさが様を呼入れて妻となし、おなり氣も亂れて「可愛や、あの人も心の中では妬ましいことであらう。さらばといつて、わしが嘉平次様から離れるのもいやぢや、又父様のお詞も尤もではある。ゑゝ死に様が遲かつた。今此濱に潮がさして來て、此身を溺らせて取つてゆけばよい」と獨言しながら、身をもだえこがれてゐる。嘉平次は「只何事も親の慈悲によつて御免なされい」といふより外に一言もなく、うつむいて泣くばかりである。

五兵衞大きに腹を立、「何事も親の慈悲とは、扨は此親ば慈悲を知らぬと思ふよな。ヲヽ、慈悲知らぬ。慈悲知らぬ親持たが不祥。此おきはにも親が有る。をのれと夫婦の約束で、人の娘を貰ふて、こつちの息子が合點せぬ、そつちの娘を返すと、すご〳〵と戻して一ツ屋の五兵衞が世間へ面か出されうか。親に恥を與へる子に慈悲とはどこへ。エヽ、淺ましい根性、二本差すを侍、一本差せば町人と計り思ふかうつけ者。大小は此胸に有る。武士に劣らぬ五兵衞とけふ迄人に笑はれぬ。其悴がどしやう骨、茶屋の銀負ふて逃隱れ、死んでも恥が拔けはせぬ。をのれが身はすたつても此五兵衞は立通す、此おきはと夫婦になれ、サアどうじや。サア否か應かの返事せい。いやといふと此脇差こりや、ハテびつくりすな己は切らぬ人も切らぬ。おきはが母は身が姉、父は他人。おきはを娶にする代り身が腹に突込んで、一ッ屋の五兵衞が一分立てて見せう。サア何と」と拔懸けて責つくる。

【註】 ○不祥―緣喜が惡い。不仕合。○すご〳〵―消然と、しを〳〵と。○慈悲とはどこへ―どこへ施せといふのか。○大小は此胸に……武士の心掛か町人の心掛かは、胸の思ひ方即ち性根で定まる意。作者はかうして外面的階級の無意義をあざけつたのである。一切が平等であることを信じてゐたのである。大小は二本の刀。○どしやう骨―性骨にて、どは罵りの爲に加へる音である。天網島でも說いた。○立通す―男を立て通す。此時代の町人はやはりかうした武士的の態度があつた。○やめ―やめ、後家。○一分たてる―面目をたてる。

【譯】 五兵衞は大いに立腹し「何事も親の慈悲で許せといふのは、それでは此親は慈悲を知らぬと思ふのだな。おゝおれは慈悲を知らぬぞ。慈悲を知らぬ親をもつたはそちが不仕合ぢや。此おきはにも親がある。汝と夫婦にする約束で他人の娘をもらうておいて、こちらの息子が承知せぬ、そつちの娘はお返しするといつて、しを〳〵と戻すなどといふことをして、一つ屋の五兵衞が世間へ顏出しがなるか、親に恥をかゝせる子に慈悲をしろとて、どこへ慈悲を施すのぢや。えゝ淺ましい根性ぢやな。二本の刀をさすが侍、一本差すのは町人ときまつてると思ふか、馬鹿者奴！　大小の刀は腰にあるのでなくて、胸にあるのだぞ。おれは武士に劣らぬ五兵衞といはれて、今日までは人に笑はれずに來た。その悴が性骨は腐つて、茶屋の金をかりて借金返さず逃げ隱れをしてゐるが、死んだとて恥はきえはせぬ。けれどおのれの身はすたつたとて、此五兵衞は男を立て通す。さ、此おきはと夫婦になれ、さ、どうぢや。否か應かの返事をせい。いやといふと此脇差だ。これ、はてびつくりするな。おのれを切りはせぬ。他人も切りはせぬ。おきはの母はわが姉だが父親の方は他人ぢや。だから義理を欠くわけにはゆかぬから、おきはを後家にする代りに、わが腹につきさして一つ屋の五兵衞の男の面目をたてゝ見せう。さあ返事をしろ、どうぢや」と刀を拔きかけてせめつける。

おきはは柄に取付て「伯父様殺す事はない。わたしが死ねば十方すみます」と、縋り止めて泣叫ぶ。

さがが悲しさ身に迫り、「死に手はこゝに只ひとり、父御前の目の前で死んで見せん」と涙の帶、たぐり取付、登らん〳〵と心計に力なく、足は泥に引締り、帶は中よりふつゝと切れ、芦邊にどうと落水と共に涙ぞ流れゆく。迚も死身の嘉平次、親の心を休むるは安い事〳〵。是一生の孝行おさめと觀念し、「ハア誤り入つて御尤。若氣の至り云替せしを捨難く、今迄御心背きしは不調法。是より魂入替へ御意を背かず、如何にもおきはと祝言」と、云へ共「さがは心を知らず、誠と聞て恨みやせん、死際迄僞る事、親を欺すか勿體なや、」と思へばせきあげ聲吃り、いひさしてこそ泣居たれ。

【註】○**十方がすみます**—四方八方がうまくゆく　○**涙の帶**—涙にぬれた帶。○**心計に力なく**—心ばかりあせりて力たらず。○**落水と共に**……どうと落ちて、落水と一緒に涙を流した。○**孝行おさめ**—孝行のしをさめ。○**誤り入りて御尤**—あやまり入つて御尤と謝罪します。

【譯】おきはは刀の柄にとりついて「何も伯父樣を殺すことはない、私しさへ死ねば四方八方がうまくをさまります」といつて五兵衛に縋つて腹切をとゞめて泣叫ぶのである。さがは悲が身にせまつて「死に手は此處に只一人あり、父御の前で死んで見せう」と思ひながら、涙にぬれた帶に、手ぐりながら取りついて、登らう〳〵とするが、計りあせつて力足らず、足は泥の中へはまり込んで、帶は中途からふつりと切れて、蘆の邊にどうと落ちて、落水と一緒に涙は流れた。何れにしても死ぬ身である嘉平次、親の心を安めるのはやさしいことである。これが一生の孝行のしをさめぢやと思ひ、「はあ謝罪いたします。御尤も千萬でございます。若氣の至りで、互に變るな變るまいと云ひ替せしたことを捨てがたくて、今日まで御心にそむいてゐたのは善くないことでございました。是からは魂を入れかへて、御意に從ひ、如何にもおきはと祝言いたしませう」と口では云ひはするものゝ、「さがはおれの心を知らないで、わが言をきいて、眞の言葉だと思ふて、無念なことであらう。死ぬ際までも、僞つて、親をだますのか、勿體ないことや」と思ふと、嘉平次は胸がせき上げて、聲がすら〳〵とゆかず、吃つて、云ひかけて泣いてゐた。

五「いや〳〵今迄幾度かたらされた。其心底に極つた證據が見たい」「ハテ證據とて何と致そうぞ」五「ヲゝ、證據には今宵直にこちへ來て、祝言の盃せい」嘉「夫は余りな親仁樣、申かはした女にもとくと合點させ、どこも首尾よふ埒明けたせうこ、明六日の晝迄待て下され」と、云へば親も打うなづき、「尤々。然らば祝言は其上、姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定まつた印の盃、一つ飲んで身にさせ」嘉「いや否出見世で終に酒飲まず。酒とてはござらぬ」五「ヲゝ、そう有ふと思ふて酒は身が持參した」と、羽織の下より一升入の秘藏の瓢箪取出し、「サア親の酌一つ飲め」「あつ」と云ふより素燒の盃取出す。

【註】○**たらされた**—ごま化されてしまつた。○**埒明けた**……ちやんと片づけた證據は、六日の晝には見せるから、それまで待たれよ。

【譯】五兵衛は「いや〳〵今迄幾度かごま化されてしまつた。其心に極つたとすれば證據が見たい」嘉平次「はて證據とてどうしませう」。「おゝ證據には、今夜直ぐにおれの處へ來て祝言の盃せい」「親父樣、それはあんまりぢや、云ひかはした女にもよく合點させ、何處にも首尾よく埒をあけ、片づけた證據は、明六日の晝までまつて下され」といふと、親もうなづいて「尤も〳〵、では祝言はその上で、姉も呼寄せて、一家一族が集つて、盃事をせう。只今心のきまつた印の盃を一杯飲み干しておれにさせ」「いや出店ではついぞ酒をのみませず、酒はござりませぬ。」「お

ゝさうであらうと思ふて、酒はおれがもつて來た」といつて、羽織の下から、一升入りの瓢簞を取出して「さ、親の酌で一つ飲め」といふと「あつ」といふより早く、素燒の盃をとり出した。

五「否々小さい、そちが飲むは知つてゐる。鉢でも茶碗でも大きな物で一ッのめ」嘉「さのみ深ふはたべませぬ」どれか是かと茶碗尋ねる其音を、聞くにもさがが袖しぼる、露の萩燒大皿出し、嘉「慮外ながら」と受けければ、五「てうど飲め」と、瓢簞傾け注ぎ懸くる。酒にはあらぬ糀の色、花の壹歩のから〳〵、さら〳〵〳〵と七八十、皿うづ高く盛あぐる。子は呆れうつかりと、親の顏のみ打守ればの親は「わつ」と聲を上げ　五「やれ慈悲知らぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味はひを呑みてしれや」と泣きければ、嘉「ハア、有難し」と計にて、親の膝に打もたれ、聲も惜まず歎きしは、性は善成涙なり。

【註】○露の萩燒―萩燒は長州萩の產にて雅致あり。露は、袖しぼる露といつて、露の萩と出したのだ。○麴の色―純白にて、銀貨をさす。○花の一分―上の麴の花をうけていつたので、一分銀のこと。此邊は此作中の見せ場にて、心中二枚繪双紙にも、いさゝか似た趣向を用いてゐる。水谷氏說によれば、豐後節の正本「加賀お菊妹背中酌」に同じ趣向のあるのを取つたものだ。○うつかり―茫然　○性は善―孟子の所說にて、私欲に蔽はれるから不善なれど、元來人性は善なりと說く。嘉平次が本性に歸つたことをいつのだ。

【譯】五兵衞は「いや〳〵小さい、そちが酒をのむことはよく知つてゐる。鉢でも茶碗でも大きな奴で一杯のめ」「それほど澤山はたべませぬ」といつて、どれかこれかと茶碗を尋ねる音を聞いてもさがは袖をしぼつてをる。嘉平次はやがて萩燒の大皿を出して「御無禮ながら」といつて受けると「丁度一杯のめ」といつて五兵衞は瓢簞を傾けてつぎかゝるのである。と酒でなくて、糀色の眞白な花の一分銀がから〳〵さら〳〵、と七八十枚ほど皿にうづだかく盛り上げられる。嘉平次は茫然として親の顏ばかり見守つてゐると、五兵衞はわつと聲をあげて「やれ慈悲を知らぬ親の姿を見るがよい。そして誠の慈悲の味はひを飲んで知れ」といつて泣くと嘉平次は「はあ有り難い」といふばかりで、親の膝に打もたれ、聲も惜まず、大きくはり上げて涙を流して泣いたのは、さすがに本心に立返つて、本性の善なることが見えたのであつた。

包むにあまる親心「不便や可愛や此春より、うろたゆる體を見て、此酒一獻飲ませたく、幾たびか思ひ寄つたれど、否〳〵氣の定らぬ間は却て毒酒と控へたり。此酒飲んで方々の恥辱を雪ぎ、無明の酒の醉醒ませ。身共は年寄氣じやうにて、病といふ事知らね共、五六日は己ゆへ胸も痛んで不食する。兎角人の親には病と成も子の心、藥と成も子の心。今宵の異見を聞入て、彌心を持直し親の藥と成つてくれ。長生したいと思はね共、せめて卅二三迄とつくと見立て、人になして死ねば樂じや」と咽返り、成人の子を引寄せて、背中を撫でて泣きくどく親の心ぞ　哀成。

【註】○無明の酒―迷ひの酒。○不食する―飯もくはぬ。○人の親には……人の親たるものにとりては、子の心次第で病氣となり、子の心次第で病氣がなほる。これは皆凡人の淺ましい態度である。

【譯】包み切れぬ親心をあふらして五兵　は、「不便や可愛や、此春から、おのれが狼狽する態を見て、此の花の一分の酒を一献のませてやりたく、幾度かさう思ふて近寄つたが、否々おのれの氣の定まらぬ間は、却つて毒になると思ふて差控へてゐた。此酒をのんで、方々にかきずてにしてある恥をそゝいで、迷の酒の醉を醒すがよい。おれは

年は寄つても氣丈にて、病氣といふことは知らぬが、此五六日の間は、おのれ故に胸もいたんで飯もくへぬ。兎角親たるものには、子の心が病氣を起したり、又病を直す藥になつたりする。今宵の異見をのみ込んで、いよ〳〵心を持直して、親のおれへ藥となつてくれ。長生きしたいとは思はぬが、せめておのれが三十二三才になるまで、とくと後見をして、人間にして死ねば樂ぢや」といつて涙にむせ返り、大人の子供を引寄せて、背中を撫でながら泣きくどく親の心は可愛想なものである。

喜平次も人々の心の中を思ひやり、一言も無くさしうつむき、落つる涙は盃の是もうへこす計なり。おきはも涙にくれながら、「晦日の夜から夕邊迄、案じて一目もをよらず、お心疲れお身の毒、歸つてお休みなされませ」五「ヲヽ、歸らふ是嘉平次、此脇差は死んだ母と身共が祝言の時、聟引出物として舅より貰ひ、枕元の守刀と爲したる故家内に何の怪我もない。ぎゐんのよい脇差、今宵は身共がおきはが親に成代り、聟引出に取らする」と、仇とはしらぬ凡夫心。五「サア今宵こそ早歸つて明日の晝迄緩りと寢よふ。やい嘉平次埒明次第起しにこい。明日顔見よう、さらば〳〵」と立出る。さらばは誠のさらばにて、明日見る顔は死に顔の、生顔見るは親と子の、是ぞ此世の別れ成る。

【註】○是も—前の一分銀が高くなつてるに對して、涙もの意。○涙にくれ—涙に目もくらくなる。○をよらす—寢ず。○きえん—緣起の逆轉したのだ。○凡夫心—それも空なことゝは知らぬのは凡夫なればである。

【譯】嘉平次も人々の心中を思ひやつて、一言もなくうつむいて、落す涙は、銀と同じく盃の上を越す程である。おきはも涙に眼もくらみながら「晦日の夜から昨夕まで、案じ通して一日もやすまれず、お心疲れなされてるのはお身の毒だから、歸つてお休みなされませ」。五「おゝ歸らう、これ嘉平次。此脇差は死んだ母とおれとが婚禮の時、聟へへの引出物として舅から貰ひ、枕元の守刀としてゐたので、家内に何の怪我もなかつた。緣起のよい脇差ぢや。今宵はおれがおきはの親に成代つて、聟引出としてお前にやる」といふのも無駄なことゝは知らぬのは凡夫心なればである。更に「さあ今宵こそ早く歸つて、明日の晝までにゆるりと寢よう、やい嘉平次方々の始末のつき次第おれを起しに來い。明日また顔を見よう、さらばぢや」といつて出立る。ところがそのさらばは、まことに最後のさらばで、明日見る顔は死に顔で、生顔を見るのは、これが最後で、これこそ正に親子の此世の別れである。

嘉平次は親の影隱るゝ計見送つて、内に駈入り、窓の下、覗けばさがは消入る計、泣しみづいて音もせず。「是々萬事皆聞てであろ。忝いと云はふか、悲しい事と云はふか。是で結句嘉平次が、親の冥加に盡るわいの」さが「否々そりやこなさんの不孝と云ふ物。今の酒とは銀そうな。どこも首尾よふ仕廻ふておきは樣と夫婦に成、親御の心を悦ばせて下さんせ。私獨死ぬれば濟む。どの道からどう云ふても、只こなさんがいとしい。惡ふ聞いて下んすな」と、眞實見へたる涙の體。嘉「アヽひとり死なせてよい物か。貰ふた一歩は百計、銀さへあれば何談合も仕易い。譬どふなれば迚、そなたを捨ておきはと添ふ氣は微塵もない。南無三帶が切れたか、表から廻つておじや。勝手しるまい連にいかふ」と、

【註】○しみづいて—ひどくぬれて。○冥加につきる—加護救濟の限りを受けるのである。○何談合—如何なる相談。

【譯】嘉平次は親の影が隱れるまで見送つて、やがて内で駈入つて、窓の下をのぞいて見ると、さがは消え入る計泣

きぬれて音もしない。嘉平次「これ〳〵萬事は皆聞いたであらう。忝けないといはうか、悲しいこと丶いはふか、これで結句此おれが、親の加護の限りを受けるのぢやわい」。さがは「いや〳〵その考へ方はお前の不孝といふものぢや。今の酒といふのは銀であるさうなが、何處もかしこも、首尾よく片づけて、おきは様と夫婦になつて、親御の心を悦ばせてあげて下さんせ。私しが獨り死にさへすればすむ、どつちからどういつても只お前が可愛い。悪く思ふて下さるな」といつて、涙を流す體は眞實心の見えたものである。嘉平次は「あゝ、獨り死なせて何でよからう。貰つた一分銀は百計りある。銀さへあれば如何なる相談も仕易いことぢや。たとへどうなるとてお前をすて丶おきはと一緒になる氣は微塵もありはせぬ。南無三寶帶が切れたか、表から廻つて來るがよい、いや勝手を知るまい連れに行つてやろ」と——

表を明けて出る所に、印傳やの長作究竟の者連れて、長「ヤア嘉平次、親五兵衛はこゝにじやげな、逢たい〳〵」嘉「譯もない長作何時じやと思ふ。親仁がこゝへいつわせた事が有。用があらば明日成と明後日成と、松屋町へゐて逢へ。歸れ〳〵」と押出す。長「是何ンとする。親仁に逢ふもそちが用。内々の手形の銀子不埒故、明後日お願申と斷りに越したれば、松屋町へいけと有。夫故自身いつたれば、親仁は是へわせたと有。千も萬もいらぬ。銀戻すか戻さぬか」と、無體に内に入りければ、嘉平次先へ駈込んで、壹歩を隱さん〳〵、と皿の上に中つくばひ、前打合せ合せても、膝の合より顯はるゝ金は金にて銀ならず。

【註】○究竟の者—强力者。○譯もない—他愛もない。○わせた—來た。○ゐて—行つて。○内々の手形—内々で貸した證文の銀を戻さぬから。不埒は返さぬ、拂はぬ意。○お願申す—公儀へ訴出る。○越したれば—人をよこしたところ。○千も萬もいらぬ—四の五のいはずと、といふやうな意。○金は金にて銀ならず—着物の前をかき合せても、中腰にしやがんでゐるので、陰裏が出るのである。それをきんはきんでも銀でないとしやれたのである。

【譯】表をあけて出る所へ、印傳屋の長作、强力ものをつれて來て「やあ嘉平次、親父五兵衛は此處にゐるさうな。逢たい〳〵」嘉「他愛もない、長作、今何時ぢやと思ふ。親父が此處へ何時來たことがある。用があらば明日でも明後日でも、松屋町へ行つて逢ふがよい。歸れ〳〵」といつて押出す。長作「これ何うするのぢや親父に逢ふのもその方の用でぢや。内々用達した證文の銀を戻さぬから、明後日公儀へ訴へ申すと斷はりに人をよこした處、松屋町へ行けといふ。それで自分が行つたところ、親父は此處へ來たといふ。四の五のいはずと銀を返すか返さぬか」といつて、無法にも内にはいつたので、嘉平次は先へかけ込んで、一分銀を隱さうとして皿の上に中腰にしやがみ、着物の前を合せても〳〵膝の間から、きんが出る。それはきんは金でも銀ではない。

長「ヤ嘉平次見事な、町人は神佛共主君共、額に戴く壹歩を、股に挾んで股が冷よふ。さ程澤山な壹歩を戻すまいとはそりやわやじや。奇麗にしやんと渡せ〳〵」嘉「コリヤ長作十六兩たゞしられ、夫がぞもとに嘉平次が、うろたへ始め、命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上ゲ。子細の有る此壹歩、粉にはたかれてもやる事ならぬ」長「ヲ丶、此長作が粉にはたかれても取つて見せう」嘉「ヤアしやら臭い、常々の嘉平次とは違ふた。口廣い事云ふと思ふな。命を先へ出して置いて取つて見よ」長「ヲ丶、取て見せう」と、掴み付手をむんずと取り、見世の小角へはつたと投付る。起上つて組付を「まつかせ」と引抱へ、上に成下に成、見世の燒物皿茶碗、花入粉微塵、五重の塔、西行法師も痛手を負、ちやぼの

鶏飛んでちり、けづめに蹴られ　長作が、轉ぶ所をどうと乘、備前鉢にて頭の鉢、「覺えたか〳〵」と、打碎かれて錦手の、目鼻血みどろちんがいに、長　嘉平次の生盗人、出あへ〳〵」と呼はつて、闇に紛れて逃失せけり。

【註】○わや―無茶無法の意の關西語。○たゞしられ―たゞとられて。○ぞもと―原因。○お願ひ申さば……公儀へ訴へるなら訴へろ　○粉にはたかれても―體を粉みぢんにされても。○しやらくさい―洒落くさい。小なまいきな。○口廣い事―口はどつたいこと。大きなこと。○まつかせ―おつとまかせ。よし來た。○花入―花瓶、花生け。○五重塔西行法師―何れも陶器製のもの　○ちやぼ―極めて小さい種類の鶏。○けづめに：足蹴にされた意を、鶏といつたから蹴爪でけられたといつたのだ。○錦手―五色の繪の具でかいた磁器。錦手の磁器などのやうに美しくの意。○ちんがいに―血だらけに。○生盗人―生は罵りの意でつけたもの。生ずりなど。○出合へ―皆來い。

【評】長作「や、嘉平次見事なことぢや、町人は神佛とも主君とも尊んで額に戴く一分銀を、股にはさんだりしては股が冷えることであらう。それほど澤山一分銀をもつてゐながら、おれに返濟せぬとはそれは無茶ぢや、ちやんと奇麗に渡せ」といふと嘉平次は「これ長作十六兩といふ金を只取されて、それが原因でおれは狼狽し始め、命をすてるかどう　といふ沙汰にまで及んだのぢや。公儀へ訴へるなら訴へろ。譯のある此一分、體を微塵にされてもやることはならぬ」。長作「おゝ此長作が身を碎かれたとて取つて見せう。」嘉「やあ小生意氣な、平生　嘉平次とはちがふぞ、口幅つたいことをいふと思ふな。命を先づ此處へ投げ出しておいてから取れるならとつて見よ。」「おゝ取つて見せう」といつて、つかみつく手をむずと取つて、店の隅へぱつたりと投つける。起上つて組つくのを、おつとまかせと引かゝへ上に成り下になりして、店の燒物は皿茶碗、花生けまで粉微塵になり、五重の塔だの西行法師なども缺けてしまひ、ちやぼの鶏は飛びちつてしまひ、その鳥の蹴爪にけられたやうに足蹴にされて長作がころぶ所を、嘉平次はどうと馬乘に乘つて、備前燒の鉢で頭の鉢を「覺えたか、性根にいつたか」といつて打割つた。長作は錦手の燒物のやうに、目鼻を血みどろ血まみれにされて、「嘉平次の盗人、皆來い〳〵」と呼んで、闇に紛れて逃げてしまつた。

嘉「エ、嬉しや〳〵、一期の本望とげたぞ。親の御恩の壹歩を、己にのめ〳〵取られふか」と、見れ共〳〵皿打明けて壹歩はなし。「ハア、今のどやくやに同道めが摑んで走つた。サア嘉平次死物狂ひ一寸もやらふか」と、貫ひし脇差ぼつこんで、駈出んとする所に、紺屋の手代若者どや〳〵と門口に、「嘉平次殿あんまりな。たまたま歸つて何事仕出す。兎角評議は明日、一足も出させぬ」と、外より門口はつたとしめ、「夜明迄張番」と、棒突並ていごかせず。嘉「譯を聞いて下され」と、ことはつてもわびても斷立ねば男も立たず、一分立たねば壹歩もなし。「死ぬ〳〵」と來る死神の、引手はこゝぞと窓の子を、踏へてひらりと飛ぶ所を、涙の袖にひつたりと抱留て、さが「どふぞいの」嘉「どうとは死ぬるばつかり。足音しやんな泣聲すな」と、身より餘りて涙川、堰も止めよ岩をこし、番は閻魔ぐしやう神、紺屋のもがり劍の山、先には死出の大和橋、踏むは三途の泥の海、迷ひこがれて三重

【註】○一期の本望―生涯の望。一生の本望　○のめ〳〵―おめ〳〵。○どやくや―混雜、どさくさ。○同道奴―相棒の奴、同伴者、○一寸もやらうか―一寸だつて逃しはせぬ。○ぼつこんで―打こんで。○ことはつても―あいさつしても、辯解しても。○斷立たねば……ことはりが役に立たぬ。○來る死神の……死ね〳〵といつて、やつて來る死の神の引つばるのは。○窓の子―窓の緣、横木といふ人があるが横木では何か分らぬ。○どうぞいの―どうしたのぢやいな。○身より餘りて……涙が身體からあまつて、流れ出て岩を越すといつたので、その間に、せきとめよの句をはさんだのだ。○岩をこし―次の道行のところに、「あれ井戸にも

女夫あるわいの」といつて二つ井戸といふ有名な井戸がある。そこの名物に岩おこしといふのがある。これに云ひかけたのだ。○番は閻魔―紺屋の手代若者達が朝まで張番をするといつたのをうけて、彼等か二人に對して閻魔といつたのだ。○俱生神―一切衆生の肩にあつて善惡を司る神。左肩にあるは男神にて同名と名づけ、善業を記し、右肩にあるは女神にて同生といふ。惡業を記錄する。閻魔が人の善業惡業を裁判するごとく、俱生神が惡業善業を記錄するから、一緒にして紺屋の手代若者が番をしてゐるにたとへたのだ。○もがり―紺屋の物干にて、第一卷に圖示す。○劍の山―もがりは、竹の枝のついてゐて危ないのであるが、その恰好から之を劍と見、向ひの紺屋のもがりが、濱岸に立つてゐるのを、地獄の劍の山といつたのだ。○大和橋―死出の山にかく。○泥の海―川底の泥になつてゐを踏むを三途川にかけていつた。

【譯】嘉平次「ゑゝ嬉しや一生涯の本望を遂げたぞ。親の御恩によりて得た一分銀を已れなどにおめ〳〵と取られてなるか」といつて見るが、皿は打あけられてしまつて、一分銀はなくなつてゐる。「今のどさくさ紛れに、一緒に來た惡者がつかんで走つたな。さあかうなつては嘉平次は死に物狂だ。一寸だつて逃しはせぬぞ」といつて貰つた脇差を差こんで　出ようとする所へ、紺屋の手代若者達、どや〳〵と門口に來て、「嘉平次殿はあんまりぢや、たま〳〵歸つて來て何事を仕出されるのぢや。兎に角評議は明日のことぢや。一足とて出さぬ」といつて、外から門の戸口をはたとしめて。「夜明まで張番をするのぢや」といひながら、棒をつき並べて動かせない。嘉平次は「まあ譯を聞いて下され」と辯解しても、詑をしても、斷りは役にもたゝず男の顏もたゝず、面目もたゝず一分もなくなつてしまつた。即ち「死ね〳〵」といつて、やつて來る死神が誘ふのは此處ぢやと思つて、窓の緣をふまへて、ひらりと飛び下りる所を、涙にぬれた袖でぴたりと抱きとめて、さがは「どうなされたのぢや」。嘉平次「どうとて死ぬより外はない。足音をたてるな、泣聲を出すな」といつて、身から餘つて流れ出る涙は川をなして、堰きもとめよと岩を越すほどである。番人は閻魔俱生神にも例ふべき紺屋の手代や若者である。又紺屋のもがりは地獄の劍の山と思はれる。目の先には死出の山ならぬ大和橋がある。蹈む所は三途川にも例ふべき泥の海である。二人は如何はせうと迷ひながらこがれてゐた。

嘉平次おさが道行　下之卷

南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀佛なむあみだ〳〵、なむあみだ〳〵、南無阿彌陀佛南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀佛を賴みても、西を後に歩み行く。極樂淨土に背く共、利劍即是と聞く時は、死する刄も彌陀の緣。南無阿彌陀佛の聲細く、心細さや來世迄。から手を引いて行く事か。若や離れはせまいかと、引合し手を引寄せて、猶抱締て泣盡す。今日の祝ひの菖蒲の露も、我が袖には憂はしや。つらや端午の紙幟、神にも世にも捨られて、菖蒲刀の切先に、かゝる契りの惡緣と、返らぬ道を辿り行く。

【註】○西を後に……極樂は西にありとされてゐるから、生玉へ行く方角からさして、後ろに歩むといひ、次の處で淨土に背くといつた。○利劍即是―利劍といふのは彌陀號即ち南無阿彌陀佛の六字のことで、般舟讃に、此六字を一たび唱へると一切の罪障皆除かれると說いてあることから、丁度利劍をもつて障害を拂ふ如しの意をとり、南無阿彌陀佛即是れ利劍といつたのだ。○死する刀……彌陀號が利劍であるといふことを逆に利用して、今度は刀も利劍であるから彌陀に緣があるといつたのだ。○鬘細く―心中の道行なる故に細々と唱へてゐるのである。それからすぐ引かけて心細さや……といつた。○憂はしや……五月の節句の菖蒲の露であるからには、祝の露であり目出度き露であるのに、我には悲の露として既にぬれたる袖をぬらす。○紙幟―布幟に對して鯉や吹流しなどを紙幟といつたものだ。それが子供の弄ぶ菖蒲刀にかけられて引かされてしまつたりすることから、切先にかゝるといひ、又世にもすてられてといつたのだ。神にもといつたのは、紙の緣で出したので、もと端午が男の子の節句であるから、主として男に關係ある神の意もふくめたのだ。○菖蒲刀―もと木刀に菖蒲をまいたもので、男兒が玩んだのである。○かゝる……切先にかゝるやうな、菖蒲刀の切先にかけて引さかれるやうな斯る運命の惡い意。○返らぬ道―死出の旅路なる故

二度と返らぬのである。

【譯】 南無阿彌陀佛なむあみだ、南無阿彌陀佛と六字の名號をたのみながら、西を後にして歩んでゆく。西を後ろに歩むが故に、極樂淨土に背を向けてゐるものゝ、此六字の名號は即ち一切の罪障を除く利劍であると聞くと、今から死ぬに用ふる刄も彌陀に緣あるものである。その南無阿彌陀佛を聲細く唱へて歩みながら、來世までもかう手を引いて行けるかと思ふと心細いことである。即ち若しや二人が相離れはしないだらうかと、互に引合ふた手を引寄せて、なほいだきしめて泣きつくすのである。今日の五月の節句の、菖蒲の露も、我には涙にぬれた袖を一しほぬらす露となりて悲しいことである。更につらいことには、端午の紙幟などが、子供の喜ぶ菖蒲刀の切先にかゝりて引さかれ、神からも世からもすてられてしまふやうな、そのやうな運の惡い緣につながれ、我等は今歸らぬ道を死出の山へと辿りゆくのである。

涙の雨に星消へて可愛ひそなたいとしい殿御、顏も見せぬか五月闇。命も世をも我身をも、今一時に堀詰の、あれ井戸にも女夫有るはひの。そちも妹脊は替らねど、こちは釣瓶の繩切れて、横に切行く道筋の、是六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと、うき數々を今宵しも、數へ盡して下寺町の、後夜の響も身にしみじみと、今ぞ二人が一生の、夢の寢覺　松屋町、是が父御の通りかや。我が生れも此筋の、親兄弟も此身とは、しらで夢をや結ぶらん。結び留てもとまらぬは、わしが人玉生玉坂の、草にやつるゝ白露を、あこがれ出る玉か迎、拾へば消る初螢。夜ルは思ひに燃れ共、晝は名にをふ遊山所の、貴賤群集の伊達盡し、人をいさめの藝盡し、茶やが葉屋の軒續き、竹の柱に節込し、稽古淨

るり太平記、琴の連歌引替て、松にはげしき雨風や。我は初音か時鳥（冥途の友と鳴連れて、いとゞしほるゝ袂かな。

【註】 ○**涙の雨**—涙が雨となりて降る、その悲の雨の意。○**堀詰**……堀詰は、命をも身をもほうる（實際井戸に身を投げはせぬが）にかけたので、此地名ほりどめともいふ。此附近に二つ井戸といふ有名な井戸があつた。二つあつたから女夫があるといひ、女夫の井戸といつたから妹背は變らぬといつた。○**釣瓶の**……こちら二人は釣瓶の繩が切れたやうに、一緒になれず、即ち眞直ぐにゆくことが出來ず。○**横切れゆく**—眞直にゆくことが出來ないで、横に切れて、横に曲つてゆく道筋にある花屋。○**六道**—地獄餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つをいふ。此道の分れる所を六道の辻といふ。人間死なば此六道の何れへか行かねばならぬと佛說ではされてゐる。○**花屋が辻**—高津の宮の下に、吉助花屋といふがあつたと。此が辻になつてゐるのを六道の辻になぞらへ、此處から道を横に折れて生玉へ行つたのだ。それで其横道を六道の新道といつたのだ　○**しよんぼりと**—しよんぼりと立ちて、憂い苦みをかぞへ。○**後夜の響**—其昔は夕から夜半までをいつたこともあるが、近くは夜半以後をいつてゐる。此處は此近代の方をいつたのだ。或は戌の刻だとか、寅の刻をもさすことがあるとは木谷氏の辭典にもあるが、此處は只曉近くの寺の鐘の意だ。○**松屋町**—鐘の音をしみ〴〵ときいて、一生の夢の覺めるのをまつ意を、父の住む松屋町にかく。○**父御の通り**—松屋町の通り。○**此身とは**—死にゝゆくのを此身とは知らずの意。○**結びとめても**……「魂はみつ主は誰とも知らねども結びとゞめつしたがへの褄」といふ、人魂を見た時の呪の歌からとつたのだ。曾根崎心中の終に近く出づ。人まづ死ぬ時には、魂魄まづ飛去るといふ說から、上の結ぶらんの句から受けて、自分は今死にゝゆくのだから、人魂を結びとめてもとまらずして飛去るといつたのだ。○**人玉**—人魂にて、あとの生玉坂とか、あこがれ出づる玉、などの緣で出して來たのだ。○**草にやつるゝ**—草の葉の上において、やつるゝが如く淋しげな意。○**あこがれ出る玉**—後拾遺集の和泉式部の「物思へば澤の螢も我身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る」からとつたもので、憧がれて我身からぬけ出した魂と思ふての意。○**夜は思ひ**……これは螢のことをいつたので、思ひのひは火にかく。○**遊山所の**—これは一轉して生玉社の境内をいつたので、此頃、見せ物にて賑つてゐた。○**人をいさめ**—人をいさましく氣を引立てしめる。○**竹の柱に節こめし**—皆竹柱の小屋をかけたものだ。竹には節があり、淨るりでも大平記でも皆節を入れて歌ふから、あとにつゞけたのだ　○**稽古淨るり**—思ふに淨るりが非常に流行して、下手な連中がわれも〳〵と語つて人

にきいて貰つたものか。天保頃の著書を見ると、かうしたことがかいてあるから既に此頃もさうであつたらう。○大平記—大平記を講釋して金をもらつたのだ。○邂歌—つまり合唱だ。それに引かへて。○松にはげしさ雨風—畫はいろ〳〵の藝などあるのだが、それに引かへて今は松に烈しく雨風があたつてゐる。○初音か時鳥—此無理な云ひまはしは、時まだ五月の始だから吾は血に啼く初音の時鳥の如く、血を吐いて泣いて、冥途の鳥なる時鳥と一緒に冥途にゆく。○冥途の友—時鳥のことを死出の田長といふ。即ち冥途の鳥である。

【譯】 わが涙が雨と降る、その悲の雨に星影は消えて、可愛いゝそなたの顏も見えず、いとしい殿御の顏も見せぬ五月闇である。命も世も我が一身までも、今一時にほつてしまふ堀詰の井戸にも二つあつて、それも女夫である。汝二つ井戸も妹背の契に於ては我等とは變らぬが、此方夫婦は釣瓶の繩が切れて、横に切れゆくのであつて、その横に切れる道筋を、これは六道の辻の新道であると思つて、花屋の辻に、しよんぼりと立つて、憂い辛い數々の事を數へ盡して後夜の鐘の響も身にしみ〳〵ときゝながら今二人が一生の最後の夢の覺めるのを待つてゐる松屋町、此町は父御の住んでゐる通りであるか。我が生れたのも此通りで、その通りを今死に行くべく通るのであるが、それを此身であるとは、さすがの親兄弟も知らずして、夢を結びつゝあることであらう。人死するに先立つては、其の魂が先づ飛んで逃げるといふが、其飛出る魂を結びとめても、わが人魂は飛んで逃けてとまらぬのであつて、生玉坂の草の葉にやつれ衰へた白露を、あの世にあこがれてわが身から出た魂かと拾ふて見ると、それは消えてなくなる初螢である。その螢こそは、夜は思ひに身を焦すのであるが、生玉の畫はさすがに名に負ふ遊び場であつて、貴賤群集は伊達を盡して集り、人を勇ましめる藝盡しが行はれ、茶屋の藁屋は軒續に連り、皆節のある竹柱で小屋を建てゝをり、節をつけた稽古淨るりもあれば大平記の講釋もある。琴の連れ歌もある。ところが畫のその賑かさに引かへて、今は松に雨風が烈しくふきふりしてゐる。我は血に鳴く初音の時鳥の如く、泣いて血を吐いて、冥途の友である時鳥と互に連れなきをして、袂は涙にしほれるのである。

「それ覺えてか此春の、花の紋日を此床で、二人寢覺の小盃。そなたま一つおれ一つ、さはる手元に

萬歳が、あいも敬有る相の山。花は 相山 散ても根に返る、人は返らぬ死出の山、死して返らぬ道ぞとは、今のうき身を謠ひしか、三途の瀨戸の燒物盡し、親は堅手の茶碗と茶碗 我疵付けて我と我、名をや流さん」「恥かしの、我が噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、サイモン坂町邊のナ通り筋、柏屋内におさがとて、年は廿の、ヨイ花盛り。客衆客衆の揚づめを、貸すの貰ふの暇無き、つらい勤の中に扨深い願ひは一ッ屋の、嘉平次ゆへに身をはめて、替るまいとの七枚起請、書いて二人が取替す、小指の血汐杉原に、押て心をみかきもり、衞士の焚火と品變る。」かの小林が舞扇、是も浮世のウタイ形見こそ、今はあだなれ松風や、無常の風も立騷ぐ。辨財天の鰐口の、鰐の口より恐ろしき、追手の聲のあれ〳〵〳〵、おはへてこゝに北向の、八幡宮の燈明も、をのれとしめり行先は、罪業の程思はれて呵責恐し鬼踊りの、寺の藪垣物凄く、身を慄はしてぞ立ちにけり。

【註】 ○それ覺えてか—流さんまでは嘉平次の詞として述べたのだ。○紋日—もの日の轉。祝ひ事祭り日などを、廓などにて紋日といひ、殊に尊重してゐる。花の紋日といつたのは花咲く頃、花見の頃のもん日の意。○寢覺の小盃—寢覺の床で小盃をくみかはしたのである。ま一つといふのは酒をすゝめる盃のことだ。○さはる手元……互にふれ合ふ手の所で。○あひも敬有る—愛敬あるの意にて、間にもがはいつたのだ。萬歳が相の山のやうな悲しい歌をやるのはをかしいやうだが、實際萬歳唄の終が相の山になつてゐる例もあるとは樋口氏の說く所。○相の山—間の山節のことにて、佛敎の無常觀を歌つたものが多く、此處では、花は散りてもから、返らぬ道までがさうである。此節はもと、僧行基が伊勢參宮の際に比丘尼に歌はせたが始めだと傳へられる。寛文延寶の頃、尾上坂と浦田坂の間なる間の山にて、路傍に小屋がけをして、女はちりめんなどを着て三味線を彈き、男は編笠をかぶりさゝらをすつて、子供を踊らせたものだと、神都名勝誌に見乞てゐる。此歌が物乞などの間にはやつてゐたのだ。著者

は此程何かの芝居の中にて、間の山節といふのを帝劇できいたが、淋しく哀しいといふよりも、至ってだらきけつた熱も情もない、他愛もない歌を歌ひながら編笠をきた女の子が一人三味線を彈いてゐた。**○三途の瀬戸**……三途の川と瀬戸燒とをかけたので瀬戸燒は、後堀河帝時代から屋張で始められた燒物である。三途川に緣のある瀬戸の燒物盡しの如くの意。**○親は堅手の茶碗**…堅手は頑固な意　茶碗と茶碗は、相すれ合つて合はぬといふのは、共に茶碗屋であるからで、下の茶碗は嘉平次をさしたのだ。**○恥しの**—此からさがの詞である。**○身の上に**—身の上に歌祭文をあてはめて歌はれることであらう。**○坂町邊**—伏見坂町にさがの家がある。**○な**—拍子詞。**○揚づめを**—のべつに揚げてゐるのを。**○貸すの貰ふの**……客の呼んであげてゐるのを、一寸他へやるを貸すといひ、揚げられてゐのを、時間を貰つて又他の客へ出ることを貰ふといふ。貸すとか貰ふとかいつて暇なく忙しい。**○ヒ枚起請**—起請は男女互の變らぬ心を誓ふ文をかいた契の證にて、熊野神社から出す群烏の模様のあるお札即ち午王などにかくのが普通で、こゝは七枚をつぎ合せて文をかくのだ。**○杉原**—杉原紙、此種の紙に、指を切つて血の出たのを押して誓ふのだ。**○みがきもり**—禁中御門の衞士。心をみがくにかく。**○品變る**—百人一首の歌を引いて、衞士の焚火とは品がちがつて、互に心をみがきながら燃す戀の火は、身をも燒くのである。**○小林が舞扇**—「形見こそ今は……」の謠曲松風の句がある所を見ると、その頃小林といふものゝ辻能が、此邊にあつたのだらうと思ふとは樋口氏の古くからの說である。**○形見こそ**……こゝは謠曲「松風」の文句「形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝこともありなんと」を引いて來たのだ。**○松風**—昔て辻能で見た小林の舞扇を思ひ出させる、能狂言「松風」を今吹く松の風にかけたのだ。**○辨財天**—生玉にありハ幡と向ひ合つてる。**○鰐口**—參拜者が打ならす銅製の具にて、佛殿などの簷口につるす。追手の恐ろしきことを此鰐口の恐ろしき姿になぞらへていつたのだ。**○おはへて**—追かけて。**○北向**—追かけて來たにかく。**○八幡宮**—生玉東門外に北向してる。**○しめり行先は**—しめりゆくと行先とをつゞけたのであつて、しめりゆくは次第に消えてゆく意。**○鬼踊**……鬼踊のあつた寺の垣の處が凄くて。

【譯】嘉平次「それお前は覺えてゐるか。此春の花見の頃の紋日に、此地で二人が逢引をして、寢覺の酒をのんで、そなたもう一つやれ、おれも一つといつて交はした。その相觸れ合ふ手元で萬歲が、相の山節を歌つて、花は散つても樹の根に歸るが、人は歸らぬ歩を死出の山へと進めるべく、死んで歸らぬ道をいそぐといつたのは、今のわが憂い身を謠つたのであるか。三途の川に緣ある瀬戸の燒物盡しのやうに、親は頑固にて、茶碗と茶碗の如くわれと合はず、我名に私は疵をつけて、我自ら名を流すことであらう。」さが「恥かしい私の噂さも、明日からは歌祭文を我身の上に引いて、坂町邊の通り筋の柏屋内におさがといつて、年は二十歲の花盛りの遊女がゐた。客どもが揚つめてゐて、貸すの貰ふのといつて、暇のない程忙がしく辛い勤の中に、一つ屋の嘉平次故に、深い願を起して、戀に身をはめこんで、互に七枚起請を書いて、二人がそれを取替し、小指の血を杉原紙に押しつけて、各心を磨いて戀し合つてもやした火は、禁中の御門を守る衞士の焚く火などとは品が變つてゐると歌ふことであらう」。かの小林の辻能の舞扇も、浮世の形見で、今は思ひ出の仇と、松風や無情の風が立騷ぐのである。辨財天の祠の簷に吊した鰐口があけた恐ろしい口よりも恐ろしい追手の聲が、あれ〳〵追かけて此處に來た。北向の八幡宮の燈明も自然と消えて、行く先の罪も思ひやられて呵責が恐しく、鬼踊のあつた寺の藪垣も物凄く思はれ、身を慄はしながら立つてゐた。さがは涙にゆさやらず、「のふ夜明に間も有まいが、何處で死なふと思ふイぞ」嘉「ヲヽ、馬場先の松原を最期場と心ざし、來る事は來たがあれ見や、星さへ一つない雨空。たとひ奇麗に死んだり共、血汐の體を雨にうたれ、むさい穢ない死に顏と、笑はるゝも口惜しい。此茶見世を最期場に極めん」と、羽織打敷座を組めば、共に寄添ふ床の上、嘉「サア今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引くと云ふ。なんにも心に懸らぬの」さが「アヽくどい事、思ひよふたこなさんと、一所に死ぬる私じやもの、浮世の本望遂げたれば、思ふ事も悔む事も霧程もないわいの」と、

【註】**○むさい**—今むさくるしいともいふ。**○座を組めば**—座はるところをこしらへると。**○無量劫**—無量は無限の意にて、劫とは極めて長時間の意。智度論に、一念五百生、懸念無量劫とあり、臨終の時の一念はいつまでもあとに引く意　**○思ひよふた**—思ひ合ふた。

【譯】 さがは涙を流して進みもせず「なう、夜のあけるに間もあるまいが、何處で死なうと思ふてか」。嘉平次「おゝ馬場先の松原を最期の場所と志ざして來ることは來たが、あれを見るがよい、星一つさへない雨催ほひの空である。たとへ立派に死んだとて、血しほにぬれた體を雨に打たれ、むさくるしい穢ない死顏だといつて人に笑はれるのも口惜しいから、此茶店を最期場にきめよう」といつて、羽織を敷いてすはるところをこしらへると、一緒に床の上に寄り添ふて、嘉半次は「さあ今が最期で、臨終の時の思ひは無限永劫までも引つぱるといふことぢや。何も心にのこらぬか」。さが「あゝ、くどいことをいひなさる、思ひ合ふたお前と一緒に死ぬる私ぢやもの。かうして添ひ遂げるといふ本望を遂げたからには、思ふ事も悔むことも、少しもない」と——

いへば平は猶泣出し、「そこをいはふといふ事。今死ぬる今迄も我は親の顏を見る。親兄弟の事計り、云ひ續けて我は死ぬるぞや。そなたも父母持つた身、けふが日の最期迄、父共母共いひ出さぬは我に未練を見せまい爲、嗜み深いそなたじやと思ふて涙がこぼるゝ」と、語ればさがはわつと泣き、「忘れていた物ひよんな事。母様ゆかしうござんす」と、男にひたと取付いて、聲の下行涙の流れ、袂に溜る哀さよ。「ヲヽでかしやつた。いふて仕廻ふは懺悔の一つ、罪を助かる種共成る。サア夫婦が親の事いふ、其詞を冥途の引導、一時も急がん」と氷の刄するりと拔き、既に血汐と鹽町の畠づたひに、「あれ誰やら、南無三寶見知の有柏屋の提燈サア寸善尺魔いかゞはせん」と狼狽ゆる。

【註】 ○そこをいはうといふこと—そこのところをいはふといふのぢや。○ひよんな—樋口氏說によれば、囚の字の廣東音にて、悪いことの意。○血汐と鹽町の—血汐にそまるところへ、鹽町といつて、血汐のしほで鹽町のしほを呼出したのだ。○寸善尺魔—善はみじかく悪は大きい、即ちとかく悪いことが多い意。

【譯】 いへば嘉平次はなほ一層泣出し「そこのことを云はうといふのぢや、死ぬる今の今まで私は親の顏を見、親兄弟の事ばかり云ひつゞけて死ぬるのぢや。ところがそなただとて父母をもつた身でありながら、今日の最後まで父とも母ともいひ出さないのは、私に未練がましいところを見せまい爲であらうが、まことにたしなみ深いことゝ思ふて涙がこぼれる」といふと、さがはわつと泣いて「人が忘れてゐたものを、悪いことをいひ出して、母様がなつかしい」といつて、嘉平次にぴたりととりついて泣けば、涙が流れて袂にたまるはあはれである。嘉平次「おゝよくいつた。云ふてしまふのは懺悔の一つであつて、それが却つて罪を助けられる種ともなるのである。さ、夫婦が親の事をいふその詞を冥途への引導として、一時も早く道をいそぐことにしよう」といつて、氷のやうな刄をひらりと拔いて、最早血汐にそまらうとするところへ、鹽町の畠傳ひに人の來る樣子がある。嘉平次「あれ誰やら人が來る。これはこまつた、見覺えのある柏屋の提灯ぢや、さあろくなことはない、どうしよう」といつて狼狽する。さがは賢く茶見世の圍ひ、葭簀廣げてぐる〳〵ぐる。平もぐる〳〵ぐる〳〵卷に、二人簀卷の妹脊川流れの智惠も才覺も、今宵限りのうき身かな。親方柏屋半兵衞、小辨諸共方々と尋ねかね、半「エヽ下主の智惠は跡から、紋付の提燈で尋ぬるは無分別。さぞ小辨もしんろかろ。をれも鍬をぬかした。こゝで暫く休まふ」と、蠟燭消して立寄るも、同じ茶見世の床の上、夫と知ぬぞ是非も無き。小辨しくしく泣出し、「いとしやさがさんどふしてぞ、傍輩といひ姉女郎、ほんの姉さん妹と、兄弟の契約してあのさん便りに勤めたに、若心中など仕て死なんしたら、私や木から落ちた猿。親方さん賴みます、早ふ尋ねて下さんせ」と縋り付て泣ければ、

【註】○圍ひ蔑簀―店のぐるりを圍ふ爲の蔑簀。○簀卷―罪人を簀で卷いて水に沈めた時代があつた。つまり一種の刑の名。○妹背川―水に簀卷をしづめた緣から、二人の姿を妹背川といつた。○流れの智惠―流れは、流れの身、遊女の身のことで、こゝでは妹背川といつたから流れといつて、遊女さがが思ひついた智惠とつゞけたのだ。○小辨―さがが愛してゐた妹分の遊女。○下主の智惠―下司の智惠は事が終つて氣がつく意の諺。○しんろ―しんどいの訛。つらい。○鍬をぬかした―茫然自失した意で、西鶴の置土產の序文などにも「鍬を手放した」といつて、茫然自失の意に用ひてある。之と同じだらうと思ふとは樋口氏說。○あのさん―あの人、さがをさす。○木から落ちた猿―たよりを失つたもの。

【譯】さがは賢くも茶見世の圍い簀を廣げて、ぐる〳〵と身を卷き、嘉平次も體をぐる〳〵卷にし、二人が簀卷の妹背の風をしたのであるが、流れの身の析角の智惠も才覺も今宵きりで要のなくなる憂い身ではある。さがの親方の柏屋半兵衞は小辨女郎と一緒に方々を尋ねたが分らぬ。半兵衞「えゝ下司の智惠は後からつくといふが、柏屋の紋のついた提灯で心中者をたづねるといふのは無分別であつた。さぞ小辨もしんどいことであらう。おれも茫然自失した。此處で暫く休まう」といつて、蠟燭を消して立寄るのも、同じ茶見世の床の上であるが、そこにゐる簀卷の二人をそれと知らぬのは是非もないことである。小辨はしく〳〵と泣出して「可愛やさがさんはどうしたであらう。朋輩である上に姉女郎であるので、本當の姉妹のやうに姉妹の約束をして、あの人をたよりにして勤めて來たに、もし心中でもして死になさつたら、私は木から落ちた猿も同じことぢや。親方さんお賴みします。速くたづねて下され」といつて縋りついて泣いたので――

半「ヲ、やさしい事よふ云ふた。親方の身になつて見い。可愛計りかさがが死ぬると大きなたをれ。年の廻り合せで損するも有事。夫は絲瓜共思はぬが、聞えぬは嘉平次。此半兵衞を男でないと思ふたかさがを連れて退手間でおれが內へ駈込、まづこう〳〵した首尾で死なねばならぬ難義、男と見懸て賴むとたつた一言云ふて見い。人にも知られた柏屋の半兵衞、いや知らぬといはふか。ほんにやれ〳〵家財賣つても救ふ心底。胸の扉に鍵がなふて無念なはい。ア、是も跡へん、今云ふて返らぬ事。さあ小辨。中寺町から藤の棚、ま一ぺん尋ねふ」と云ふ所へ、西東より大勢つれ、「あの茶見世に泣聲はさがと嘉平次。サア仕てやつたぬかるな」と、ばら〳〵と立懸り、半兵衞小辨にむさぼり付き、「死なば嘉平次ひとり死ね。大事の奉公人よふ殺さうと仕たなあ」と髻取るやら引張るやら、提燈上げて顏と顏、町人「ヤア半兵衞でないか」半「町の衆か」町人「エ、優長な、人に世話をやかす事じやないわい。さがが事を仕出せば、損といひ大きな町の騷じや。サアたてたて」半「いかい皆の苦勞じや。草臥た上に小辨がめろ〳〵泣くので、共に氣が落ちて來て少こゝで休んだ。どふでこいつら死のふはい。つんと足が進まぬ」と、歸る柏屋止る柏、命枯葉の夜嵐に、又東西へぞ別れける。

【註】○大きなたをれ―大損失。○絲瓜とも思はぬ―何とも思はぬ。○胸の扉に……鍵があらば開けて吾が胸の中を見せられるが、それがないのが殘念。○跡へん―後の意。間にあはぬ 後のまつり。○藤の棚―曾根崎心中にもあつた。谷町筋で、藤が繁つた意からいつた名。○仕てやつた―うまく捕へた、しめたなどの意。○むさぼりつき―うれしくてならぬやうにとりつく。○顏と顏―顏を見ると、一方もその顏を見て、互に顏を合せ。○事を仕出せば―心中でもやれば。○つんと―とんと。○歸る柏屋―小辨と共に歸る柏屋の主人。○止る柏―簀卷の嘉平次及さがを、柏餅と見たのであつて、二人をあとにしての意。○命枯葉…命をからす夜嵐に。

【譯】半兵衞「おゝやさしい事をよくいふた。親方の身になつて見ろ。可愛い計りではない、さがが死にでもすると大損害ぢや。年々の廻り合せで損をすることもあるが、それは何とも思はぬけれども、分らないのは嘉平次め、此おれを男でないと思ふたのか、さがを連れて身を隱す間に、おれの所へかけこんで、先づかく〳〵の都合で死なねばな

らぬ難儀がある。男と見て頼むから叶へてくれと只一言いふて見ろ。人にも知られた柏屋の半兵衞のことぢや、いや知らぬといふものか。木當に、家財を賣つても救つてやる心でをる。此胸の底を見せてやりたいが、殘念なことは鍵がなくて胸の扉があかぬ。あゝこれも後の祭ぢや、手後れで、今更いふても歸らぬことぢや。さあ小辨、寺町から藤の棚あたりまで、今一度尋ねて見よう」といふ所へ、西東から大勢が連れて來て、「あの茶店に泣聲のきこえるのは確にさがと嘉平次ぢや。さ、しめた、手ぬかりするな」といつて、ばら〳〵と立縣て來て、半兵衞と小辨とにむさぼるやうにとりついて、「嘉平次死ぬなら一人死ね、大事な奉公人をよくも殺さうとしたな」といつて、髻をとるやら、引張るやらして、提灯をあげて顏を互に見合せると、驚いて町の人は「やあ半兵衞ではないか」「おゝ町の人達か」町の人は「ゑゝ優長なその風は何ぢや、人に世話をやかす事ではないぞ。さがが心中でもやらかしたら、損は勿論のこと、町の大騒ぎぢや、さあ、たつた〳〵。」半兵衞「皆さん大きな御苦勞ぢや、くたびれた上に小辨がめそ〳〵と泣くので、一緒に元氣がなくなつてしまつて、少し此處で休息した。此奴等、どうで死ぬのだらう、とんと足が進まぬ」といつて歸る柏屋の主人は、止る柏屋のさがが、命を枯らす夜嵐の中に分れて又東西へと進むのであつた。

人影なければ嘉平次も、さがも葭簀ほどいて溜息つき、さが「今のを聞いてか」嘉「聞きやつたか、半兵衞が情の詞、エヽ男じや過分な」さが「小辨が優しい心ざし」添いと嬉しいと、胸に余れば聲にもる、二人が歎ぞ至極成る。嘉「アヽ何のかのと隙どる程涙の種。サア今じや念佛申しや」と引寄すれば、さがは「わつ」と泣出し「まちつと〳〵、まあ待つて下され」と前後不覺に取亂す。嘉「待つてくれとは命が惜しうなつて來たか」さが「アヽ今になつて愛想づかしいふて下んす。命惜しいほどなら高で身をうつ事もない逢初めてけふが日迄、烏の啼ぬ日はあれど、顏見ぬ日もなかつたに、死ぬる今夜に限つて顏さへ見えぬ雨空、未來の暗さが思はれて、夫が悲しうござんす」と、歎けば男も涙ぐみ、「ヲヽ道理、我とても今生の名殘、ま一度顏も見たけれど、燈とては夏草にせめて螢の影でもほしい。ヲヽ思ひ當りし」と、小石拾ふて脇差の、鍔を火打の石の火の、光待つ間の命の樂み、下緒の房のしげ糸を、ほくちとなしてかち〳〵〳〵、かつしと打つて吹付る、火影も息も幽にて、互に見交す顏と顏、「永い別れになつたか」と、わつと計りに縋付き、大聲上げて歎きしは理りせめて哀なり。

【註】○過分な―彼は男らしい男ぢや、ありがたい意。○愛想……何といふ愛想のつきることをいふて下さるのぢや。○高で身を打つ……高では、總計の意で、つまりの意。身を打つは身を滅す意。○未來の暗さ　前途に光明に接して淨土にゆける見込なき意をさす。○夏草に―夏草のなをなくにかく。○しげ糸―繭の上皮からとつた粗雜な糸。しげ糸とにごらぬ方がよい。○ことはりせめて―筋道から推しつめて。

【講】人の影　なくなると嘉平次もさがも葭簀をといて溜息をつき、「今のをきゝなされたか」「きいたか、半兵衞の情のこもつた詞、彼は男氣のある人間ぢや、有りがたい」「小辨の優しい志し」といつて、添いと思ふ心と嬉しいと思ふ心と、共に胸にあまつて、漏れて聲に顯はれ、二人が歎くのは尤も至極である。嘉平次「あゝ何のかのといつて、ひまのかゝる程涙の種ぢや、さあ、今こそぢや、念佛をとなへるがよい」といつて引よせると、さがはわつと泣出して「今少しまあまつて下され」といつて、前後を覺えぬまでに樣子を取亂すのである。嘉平次「待つてくれとは命が惜しくなつて來たのか」。さが「あゝ今となつて、愛想のつきた詞をいふて下さること。命が惜しい程なら、つまりは身を滅すこともない。互に逢ひ初めてから、今日の日まで、烏の啼かぬ日はあつても、お互に顏を見ぬ日とてはなかつたに、死ぬる今夜に限つて、顏も見えぬ雨空であるとは、未來で成佛が出來るかどうか、前途が暗くはないかと思はれて、それが悲しい」といつて歎くと、男も涙ぐみて「おゝ尤もぢや、私とて此世の名殘に、今一度顏も

見たいが、燈とてなく、夏草にせめて螢の火でも照つてくれゝばよい。おゝ思ひ當つた」といつて、小石を拾ふて脇差の鍔を火打の石とし、火の光の出るのをまつ間を樂みながら、下げ緒の房になつたところのしけ糸を火口として、鍔にあて、かち〳〵と打つて、吹きつけるのであるが、火影も息も幽かで、それにて互に顏を見交はしながら、「永の別れになつたか」といつて、わつと泣きながら縋りつき、大聲をあげてないたのは、道理を推して考へても哀である。

既に明行烏の聲、泣々胸を押廣げ、さが「サア何にも思ふ事はない」嘉「ヲゝ、でかした〳〵」と、拔いた脇差取直し、「南無阿彌陀佛」とさし通せば、うんとばかりのり返る。ぐつとゑぐれば手足をもがき又さし通せば身を悶へ、ゑぐりくり〳〵目も眩めき、婆婆に出る息絶果てて、終に冥途に引入たる、敢なき最期ぞ哀成る。死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ、同じ双と思へ共、守にせよとの親の讓り、此双に死するは最後の不孝。二世迄夫婦抱帶、契りは先の世〳〵迄も、重ぬる床の竹すがき、死顏見せじと押包む。羽織も空も黑羽二重、床几をがはと踏はづせば、色も變じて目眩き、忽ち息は絶てける。惜や五日の花菖蒲、花の體を血に染めて、戀の双に伏見坂の、世語りとこそなりにけり。

【註】○のり返る—そり返る。○敢なく—頼みがいなき。○同じ双—同じ双で死なんと。○抱帶—女のしごき、夫婦相抱くにかけたのだ。そしてこれで縊死したのである。○竹すがき—床の上に簀の子がこしらへてあるのだ。○羽織も空も、羽織で自分の顏を包むのである。○花の體—まだ若い意。○伏見坂—双に伏すにかく。

【譯】既に明け方となりて烏の聲がすると、女は泣く〳〵胸を押廣げて「さあ何も思ふことはない」といふ。「男はお

〳〵それでよい」といつて、拔いた脇差を取直して、南無阿彌陀佛といつてさし通すと、女はうんとそり返る。ぐつとゑぐると手足をばた〳〵とする。又さし通して悶えるのを、ゑぐり〳〵すれば目も暗んで、婆婆にゐるべき息はたえて、終に冥途に引つぱり入れられた頼みなき最期は哀である。男は死骸をとりつくらうて、刀の血をぬぐひ、同じ刀で死なうかと思ふたが、お守にせよとての親の讓り物であるので、此刀で死ぬは最後の不幸と思ひ、二世までも夫婦を抱き合せる帶だと、女の抱帶をとり、夫婦の契りを先の世までも重ねるべく、竹の簀の子の上にて、死に顏を人に見せまいと思ひ、黑羽二重の羽織で包むと空も眞黑である。やがて床几をがはとふみ外すと、顏色も變つて目もくらみ、息は忽ちたえた。惜いかな五日の花菖蒲ともいふべき花の如き若い體を血にそめて、戀の双に伏して死んだといつて伏見坂の世間話とはなつた。

都新聞（三年四月二十四日）

全譯近松傑作集第一卷

伊原青々園

近松の原作を複刻したものは數へ切れぬ程多く出來たが、その原作を時文に譯したものは此れ丈が最初であらう。近松のやうに既に古典に屬して、原作のまゝでは現代の人に解し難い作品は、斯やうに時文に碎いて見せる必要があるだけ、この書の如きはその要求に應じたものと云ひ得られる。

同じ古典でも「古事記」や「源氏」のやうに大昔の作は却てこれまでに註解や研究が行き届いて居るだけ、それを時文に譯する事は意外に容易いかも知れぬ。近松は比較的近代の作だから易いだらうと思ふと却つてそれがアベコベである。この點に於て譯者の苦心を察しねばならぬ。

全部四卷で始めの三卷は世話物だけを收め、後の一卷には時代物を收める豫定らしい、近松の難解な點は時代物より世話物に多いから、この方針も當を得て居る。

そうして第一卷には「曾根崎心中」から「宵庚申」まで九つの心中物が選んである。假りに原文をどう云ふ具合に譯されたかといふ例に、最も有名な「曾根崎心中」の道行の發端を少しばかり比較して見ると、

「此の世の名殘り夜も名殘り死に行く身を譬ふれれば仇しが原の道の霜一足づゝに消えて行く」（原文）

「此の世の名殘りであり夜もまさにあけんとする時死に行く身を例へて見ると墓場の路邊におく霜の樣で一足づゝ進むにつれて消へて行くのである。」（譯文）

「夜も名殘」「を夜もまさにあけんとする時」と譯した等はピッタリ原文の意と合はない樣に思はれるが、譯と云つてもパラフレーズするのが目的であるから、それ程嚴密に穿鑿するのは無理であらう。それからもう一つ殘念なのは、對話の「こざんす」とか「下され」とかの詞を、現代式に「です」とか「下さい」とかいふ樣にくだいてもらいたい事である。折角時文に譯しながら、やはり過去の詞をつかふと僅か百年をたゝない中に、更に譯文を譯する必要が生じはしまいか。

本書の體裁は始めに原文を載せ次ぎに難解な語の註解を掲げ、その次に譯文といふ順序になつて居る。この種の註解の書も之れまで公けにされたものが多少はあるが、本書は一々それを引用したほか、更に新らしくて正しいと思はれる解釋が多々ある。著者自身も卷首にことわつて居るが「天網島」の首めの「なやは唄」は上田萬年博士が今より三十年前に帝國大學で始めて近松を講義された時から疑問になつて居る語である。それを「納屋端唄」と解釋して唄の文句まで掲げたは卓見である。それから「跡追心中」の

「くづいを」といふ語を、「國栖魚」と解釋したのも耳新らしい。しかも著者はそう云ふ新解釋の出所を正直に明かして、すこしも我が物顔をしない態度が立派である。卷頭の挿繪も註解のたらざるを補つてよい。

× × ×

時事新報 三年五月廿六日）

全譯近松傑作集批評

千代田女專教授　望月世教

若月保治氏の「詳註全譯近松傑作集」は近頃注目すべき良著である、著者は夙に文壇の舊知己であつて、現に劇作家として世に知られて居る。氏はふとした起緣から在來の近松研究の不十分を慨し、特に創作の傍ら、近松の研究に志し、最も精到に最も忠實に、近松詞章の解釋を試みられた。

氏は幾多前賢の研究を參考して、愈々實地の解釋に當つて見ると、存外諸家の遺げて居た難解や誤解や不徹底な解釋やを多く見出したので、此研究の益々必要を感じた折も折、こゝに一道の光明を得たのは、東洋文庫の樋口慶千代氏が隱れたる近松の研究家として、十數年來その研究に從ひ近松の作の外同期の著作數万冊をも讀破して、淨瑠璃の詞章は勿論時代の文化、風俗、言語等に造詣の淺からぬ事を發見して、氏に益を請ふたことであつた。

樋口氏も又その研究の結果を若月氏に提供する事を吝まず、若月氏も又樋口氏の說をよく容れ、世の竊に他の說を採りて平然我が物顔する輩の類の顰に倣はず極めて謙虛なる態度を持して前賢の所說と樋口氏の所說を比較對照して、そのまされるに從つた。若月氏の著作者としての態度は寔に學界の美事として世に傳ふべきであると思ふ、かくして先づ曾根崎心中以下の心中物九篇を收めた第一卷が刊行された。今著者が樋口氏の說によつて前人の說を訂した二三を擧げて見ると、

○それほどにないことさへ—藤井博士は近松全集で、此處は私には包まず云はんせずに隱さんしたは……と訂正せぬと意味が通ぜぬと云つて居られるが餘り訂正せずに說く所にその價がありはせぬか。樋口氏の說—「それほどに私に隱すべきでないことまでも」のつまつたものだ……一七頁

○巾着の扉が八文字に開け—巾着は淫賣婦の異名、その扉が開くとは誰にでも博愛主義をやる意にて八文字は遊女の歩み方にもかくとは、木谷氏の說なれど樋口氏の說によればこの當時は巾着を淫賣婦の意に用ひて居らずと云へば、只財布が空になつた意と解するより仕方なし。（七四頁）

○我等一人は緣者—おれ一人は身内の證人。又今まで何人も觸れをかつた語句に對して前人未發の解を施した

例を擧げると、

○泣くかいばらのつるさきに——いばらののびて行く姿を、つると云つたのを、地名の鶴崎にかく。鶴崎町は今も四國地に渡る要地として大分を去る二里にあり。樋口氏の說「つるさき」が地名であることは次の「べう」が別府であるによつても明かで、此說など樋口氏前に唱へたるものがないと。織織虫が織るその袴を茨の刺でやぶるなといつて、いばらの先で鳴いて居る意（六八頁）

○烏帽子實—烏帽子の如く頭にいたゞく。尊ぶ意。樋口氏說。（二三五頁）

以上擧げた樣に、本書の特色は、確に樋口氏の新說に準據した點にあるけれども、そは各篇の急所々々に過ぎぬのであつて、全篇を通じて見れば勿論大部分は若月氏の勞作になつたものである。そして氏自身も云つて居るやうに、前賢が難解な箇所を巧に回避せ爲に、一々全譯を施して、隅からすみまで盡くを解釋したのであるが、一體語句の解釋より全篇の現代語譯の方が、又却て困難なのであつて、殊に近松の自由奔放な韻文を散文に改譯するだけでも、可成りな努力を要するのである。而も逐語的に原文に忠實に且つ現代の語脈に合せて行くことは、却々容易な業ではないのであるが、是亦近松には最初の試みであつて從つて本書の特色の一つでもあり、著者は此の方面に大なる成功を收め、其の譯文が立派に意を成して居り、これ丈を讀んでも優に近松の作品を內容的に研究することが出來るのである。又更に本書を飾つて居るのは、本文中に含まれて居る事實の中十九種の書圖を參考として口繪に收めたことであつて、中には最も珍らしいものもあつて、本文の理解を助ける上に極めて有益である。

之を要するに、本書は近松の註釋として全く新機軸を出した、最も完全なものである。尤も新說を著者に提供した樋口氏の功も沒すべからざるものであるが、又之を世に紹介した著者の功も亦更に沒すべからざるものである。

而も菊判五百五十頁密植の大冊（本文五號、註六號、譯九ポイント）で其の註譯は考證牽鑿の弊に陷らず、實に簡潔で無駄が無い（同時に親切丁寧を失はず）點から見ても、如何に內容が豐富であるかを知る事が出來る。但し欲を云へば、新說を示す場合に往々其の結論のみが示されて、その根據が示されないことがあるのは、聊か食ひ足らぬ感を免れぬが、固より白璧の微瑕に過ぎぬ。纂には宮森麻太郎氏の英譯近松が倫敦から出版されて世界に紹介され、今又若月氏によつて近松の全譯が公にされて斯界を稗益することの尠少ならぬことは慶ぶべき至りである。願はくば著者自重して豫定の通り全四卷の完了を必期されむことを。

× × ×

報知新聞

全譯近松傑作集　第一卷

立正大學主事　大槻古壽

今日多くの人々から、吾が偉大なる劇作者近松とか、近松を有する誇などゝ稱せられながら、しかも普通一般の者には、其作品を充分に理解し味讀することが、困難なのは勿論、殆んど不可能に近いと云ふことは、實に遺憾千萬である。其の原因はと言へば近松の作品が、語句の用法に於いて、今日と非常に異つてゐるのみか、當時の方言は隨所に挿入されてをり、しかも文法は滅茶苦茶で、地の文と人物の言葉との關係が明瞭を缺くうへに、其れ自體が諧物である關係上、特に調子といふことに重きを置く所からかけ詞や極端な省略的記述法が用ゐられて居りたどして甚しく難解な爲である。近松に關しては、今日迄に、藤井博士の近松全集を始め、木谷蓬吟氏の大近松全集附近松辭典、その外なほ幾つかの書が公にされてゐる。然しながら、其等によつても猶ほ我々に幾多の不可解な點が殘されてゐるのを奈何しよう。この時に方つて、若月文學士の詳註全譯近松傑作集の出版された事は、恰も渴に喘ぐ者に一椀の清冽な水を與へるものと言つても過言ではない。

本書に收められてゐる作品は、心中物九篇で、各篇毎に其の詳細な解說を附し、文中の六ケ敷い語句には殘らず註釋を施してある。殊に註釋に就いては、何處までも學究的態度を持して、決して世間に往々見るやうに、先人の說や解釋をすつかり其のまゝ横取して、恰も自己の新說、新解釋のやうな顏をすることなく、此れは誰々の說、誰々の解釋と、はつきり其の人を擧げてゐる。なほ近松の文に於いては、今日まで全く不明とされてゐる點が尠くないが、其れ等に對しても、著者は夫々に妥當な說明を下してゐる。其れは一度本書を繙く者の隨所に發見することであらう。今試に一、二例を擧ければ「心中二枚綸草紙」上の卷

さらば笹原小蟹の秋に染糸繰出し五百機立てし機織や泣くかいばらのつるさきに野飼の駒の優しくも……

の點を附した句については、今日迄いづれの書にも、全然說明されてゐないが、本書に載す所の樋口氏の說によつて始めて明瞭になつたのである。

また「卯月の潤色」中の卷

語れば親の恥晒しいへば詞のくずいをの夜の衣の我夫の……

のくずいをに就いては、藤井博士は其の著「近松全集」第八卷に於いて「くずいとの誤なるべし、糸ならでは、夜の衣とつゞかず」と云つて、其れを誤植とせられて居るのに對して、反つてくずいをの方が正しいことを、典據を擧げて說明してある。

なほ「心中天の網島」下の卷

迎ひの駕籠も大和屋の……種蒔きちらして歸りける

の駕籠屋は、內へ入つたのか、外に居るのか、實に分明しないが其れに就いても妥當な註解を與へてゐる。

加之本書はさらに添へるに、全文の口語譯を以てしてゐる。現に或人は「近松の作品は、口語などに爲べきものではなく、聯想で味讀すべきものである」と言つて居られるが、然し其れは、單に近松について或る域にまで達してゐる人を中心としてのみ言ひ得る事であつて、普通一般の者は、理解が出來て始めて味も氣分も感じられるのであるから、譯が解らなくては、味も何も有つたものではない。此の點からしても、著者の此の企は、極めて意義あるものと言はなければならぬ。

然しながら、其の口語譯の中に、往々現代語ならぬ稍々古い言葉が用ひられてゐるのは、純國文學者ならぬ著者に對して言ふのは、少々無理であるかも知れないが、隴を得て更に蜀を望む者として其の點を附記したい。

遮莫私は著者の此の大努力に對して、衷心から敬意を表すると共に、近來の快著として、近松を知らうとする士に、進んで本書を推奬したい。—三、六、二〇—

× × ×

大坂毎日新聞（昭和三年七月卅日掲載）

全譯近松傑作集

文學博士　笹川臨風

西鶴と巢林子とは、ともに文章の脈絡に一風ありて、世にこれを解釋するに難きのみならず、西鶴には當時の俗語多く、巢林子には東西の典故を自由に使用せる爲、これを釋明する事は容易の業でない。尤も近來近松淨瑠璃に關した書籍は多く刊行せられて居るから、從來難解とせられたものも、大いに闡明となつては來たが、なほ疑はしい個所が多々ある。これについては多年近松辭典の研覈に盡瘁して居られる樋口慶千代君の大著が早晩發行せられるであらうから、その曉には疑雲の霽れる機會も到來することと思はれる、若月君の本著は世話物九篇を收めこれに註と釋とが附いてゐる。從來の成書と樋口君との說によりて一々註されたのであるから、先づ今までの說を集大成したものといつてよい。加ふるにこれが通解を試みられてゐるから近松淨瑠璃に初心のものも一讀してその意味を鮮明するを得て、便利この上ないものである。

慾を云へば前後の照應や襯染やら、文章上の苦心をも併せてち

よつと評出して貰ひたかつたと思ふ。

近松淨瑠璃を讀むに心をとめて忘れない樣にすべきは、それが操り人形のために作られたと云ふ事である。歌舞伎と同じやうに思つては折角の近松の苦心が徹底しない。著者は讀者に向つてくれ〳〵もこの點を注意すべきことが望ましかつたのである。近松を評するに先づこの約束を知つておかねばならない。

諸說の一致しないところは著者一々これを並べ記して、多く斷案を下して居ないが、それも著者が忠實の致す所である。又大體に於て要領を得て居るが、まだ疑問の存するものもないではない。なほ大して珍らしくないことを著者は非常に珍らしげに吹聽してゐるのもあるが、一般の讀者に向つては或はこれも必要であらう。

註はあつてもこの書の如く全體にわたつて解釋したものはなかつたのであるから、近松を知らうとする人にとりては、此書はこの上ない重寶なものであり、近松研究の津梁となることが出來る。著者の努力を多とし更に第二第三の續刊を見、殊に時代物の難解とすべきものをも追々公にせられんことを期待してやまない。

× × ×

歌舞伎（第四卷八號掲載）

全譯近松傑作集　第一卷

川尻清潭

近松劇が舞臺へ上演される度毎、いつも其文中に難解の文句のあるのに苦しめられる。然もそう云ふ場合には登場俳優の受持の役々の臺詞に就て、又淨瑠璃語りの太夫は文章の字句に就いてどう云ふ意味であるのかと質問を發する。それがいづれも難解の字句であつて在來の近松研究書を調べても解釋の施して無いものにぶつかる事がある。即ち專門の研究家でさへ斷案を下し得ないのであるから、遂ひに分らず仕舞ひで終る。とかく何事によらず必要とするものが見つからつい位心淋しい事はないが、今回發行の若月保治氏の著は全文を現代語に譯してある點に於ても意味が受取易く、又一句毎に詳註を下して、殘す所の無いのは全く空前の大努力であるされば好義家は勿論俳優及好劇家は座右に一本を構へて難句解の栞とするに無二の好著である事をこゝに紹介する。

國語及國文學（三年九月號掲載）

詳註　全譯近松傑作集　第一卷

一高教授　守隨憲治

豫定の目次によると、心中物が第一、心中物を除いた世話物全部を第二第三、時代物の或物を第四卷といふ風に分類してあつてその第一卷たる本書が今度出版されたのである。曾根崎心中以下一枚紙草紙、重井筒、卯月の紅葉と潤色。双は氷の朔日、今宮心中、天網島、宵庚申と、以上九篇を收めて、解題、語釋、通釋を附したものである。

著書紫蘭氏は飜譯家創作家として既に認められた人で、その氏が古文に注目され、而も自ら筆を執つて、著者自身も言はるゝ通り隨分難しい近松の全譯を敢てされた點を先づ悅びたい。著者は緒言の中に本書執筆の動機について說明されて、「一般の讀者には說明さるべくして說明されてない所が餘りに多い」爲め、近松を紹介せんと街頭に立つたのだといはれてゐる。此點からいへば、眞に其人を得た事といふべく、而も其爲めに眞面目に研究執筆されてゐる點は、單に流布の意味でのありふれた近松全譯とは違つた價値が認められる。本集が更に第二第三と繼がれる事を望むと共に、更に終卷に計畫されてゐる文化史的研究、人形劇的研究の發表をも切望するのである。

一體、近松の全譯といふ樣な事が非常に面倒なのは、いふ迄もなく第一に韻文といふ點である。韻文口譯の困難は說明の限りでないが、而も、淨瑠璃といふ特殊な韻文である事である。淨瑠璃はいはゞ人形劇の脚本である。人形劇である爲めに、臺詞と地の文等との移りや別は、殆ど作者の自由意志に在る。殊には日本語のもつ特質が餘りに巧みに利用されてゐて、其一語だけしか其場合働く事が許されない事すらある。そこが、例へば韻文の所作劇の脚本等を口語に譯す場合よりも一層增した、當惑を生む本書が叮寧に全譯をされ、對話の人物の不切な部分には人物名を施したり迄してあるが、此根本的な困難は矢張り其儘に拭はれてないやうである。然し夫は强求が無理である。本書の性質目的が夫によつて損じられる等とは考へない。唯々其點には、著者が幾重にも注意を重ねられたいと思ふ

語の解釋に關しては、著者も言はるゝ通り、近世の文藝には字書が無いので、隨分苦心され、發見もされた樣に見うける。本書の解釋に、近松語の權威者樋口氏に質されたのは本書の强味である。が一般向にせよ、も少し詳說された方が親切ではあるまいか。例へば「願以此功德」の偈の如きも二樣あつてみれば、どうせ短いのだから、其偈全文出す心要があらう。近松が一方を使つたか兩樣使つたかの說明にもなると思ふ。夫につけて、文字の說明の不備は挿畫を十分に利用されて欲しい。卷頭の挿畫だけでは

如何かと思ふ。殊に觀音廻りの條の如きはどうしても地圖を要する。次卷に入る計畫であつたら、廓の圖も加へられない。序に、欲を言へは、譯文方に、例へば網島の「落る涙に堀川の、橋も水にや浸るらん」が「堀川の橋も水に浸るだらう有樣である」とある點、些か氣になるので附加へる。

右の如き要求すべき點はあるが、然し、本書の刊行が、前にいつた通りの意義を持つ上には何等遜色を示すものではない。近來「吾を知る」心に貯覺めて來た一般日本に對ひ、本書が貢獻する所は決して尠からざるものがあると思ふ。

全譯近松傑作集 第二卷
定價 五 圓

昭和四年九月十五日印刷
昭和四年九月二十日發行

□版權所有□

著作者 若月保治
發行者 照井健伍 東京市神田區南神保町九番地
印刷者 安田久仁 東京市神田區表神保町一番地
印刷所 健捷堂印刷所 同所

發行所 東京市神田區南神保町九番地 太陽堂書店 振替東京三一七二五 電話九段一九四四

東洋大學教授
日本大學講師
文學士　若月保治先生著

詳註 全譯近松傑作集

第一卷　心中物……曾根崎心中○二枚繪草紙○重井筒○卯月の紅葉○卯月の潤色○心中刃は氷の朔日○今宮心中○心中天網島（紙治）心中宵庚申（八百屋）

第二卷　世話物（上）……大經師昔暦（おさん茂兵衛）五十年忌歌念佛（お夏清十郎）丹波與作（重の井子別れ）夕霧阿波鳴渡（夕霧伊左衛門）薩摩歌（おまん源五郎兵衛）生玉心中○心中萬年草（心中物）

第三卷　世話物（下）……冥途の飛脚（梅忠）淀鯉出世瀧徳（淀屋辰五郎）長町女腹切○壽の門松○鉦入三重帷子○博多小女郎浪枕（毛剃）堀川波の鼓

近松は西鶴と共に近代日本文學の粹である。而も其難解は之まで國文の研究者をしてすら近づくことを躊躇せしめた。即ち劇の研究者であり、關西に育ちて近松の語彙研究に少からぬ便宜を有し、而も閑を得て數年の間之に沒頭する機會を得た隱れた篤學者たる著者は　此難解の近松を難解でなくして何人にも解し易からしめんことを企てた。收むる所世話物の全部と時代物の中傑れたる數篇とを合せて全三冊とした。一般愛好者にも最も便利なる指針たるべく、原作の全文の外に各篇の解說と難解語の極めて詳密なる註釋と、更に原文の全部に亘りて一文をも餘す所なく現代語の註釋的譯文を添へたものにて、未だ嘗て試みられたることなき破天荒の近松註釋書である。

菊版全三冊各冊六〇〇頁
定價第一卷四圓五十錢
第二・第三各五圓
送料各三十錢

太政官飜譯

日本西教史

全二冊

新式九ポイント活字組
上卷●菊版總頁六三〇頁
下卷●菊版總頁六五〇頁
定價各五、八〇送料各二四

基督教の最初の渡米は足利の末葉であるが德川の政策に依て我國に傳はる文獻は殆んどない本書は佛人クラセ氏が一七一七年刊行したものゝ譯本であつて全然東西文化の交通のなかつた當時外人の眼に日本國の人情風俗は如何に映じたかの觀察には少からず興味がある。また日本耶蘇教史としては論勿外人の見た信長や太閤等戰國時代の英雄の活躍振り德川代々の宗教對策其の他いろ〳〵な點に於て本書は最も貴重な且つ興味ある文獻である。

東京高等工藝學校
教授　森谷延雄先生著

西洋美術史

古代家具篇

本文●最上色コットン紙
寫眞●最上色アート紙
四六二倍判美裝
寫眞●凸二百三十個
定價六圓五十錢
送料三十錢

工藝史及文化史研究の好資料　著者は木材工藝研究家の立場より西洋家具の沿革に就て旦つて得たる大英博物館のエッチ●アールホール博士の指導を基礎とし、こゝに第一卷古代家具篇を完し、漸次近代篇に及ばんとするものなり。本篇を分ちてエジプト●パビロニヤ及びアフシリヤ●グリーク、ローマとし、鮮明なる多數の參考圖に依る詳述は未だ歐米に於てもまだ本邦に於ても且つて見ざる程度のものにして、著者が學究的の態度と努力は蓋し美術史、文化史研究家玆に一般木材工藝家●室內裝飾家●家具製作に關する技術者の好伴侶として缺く可からざる良書と謂ふべし。

東京高等工藝學校教授
東京高等工藝學校教授
鎌田彌壽治先生
伊東亮次先生　共著

天然色寫眞術

菊版上製四五〇頁
口繪及挿繪一二〇
定價四圓五十錢
送料三十錢

百花燎爛と咲き亂れた花園の景色も、これを普通の寫眞に撮ればただ白と黑との寫眞畫になる。色彩の世界に住む吾人がいつまでもこの色の無い寫眞畫に滿足することが出來るであらうか。最近天然色寫眞術が急速な進歩を遂げ、新發明や新方法が續々と現はれて來て自然の色彩をその儘寫眞に撮ることが出來るやうになつた。本書はこれ等天然色寫眞の凡ゆる方法を網羅し極めて平易に且つ懇切に說述した唯一の良書である。されば好事家專門家を問はず苟も寫眞に從事する者の好伴侶たるは勿論何人もこの書によつて天然色寫眞を撮ることが出來る。廣く寫眞に興味を有する人に薦む。

清水孝教先生著（卷末ニ系圖及年代表を附す）

刀劍の新研究

菊版上製函入
九ポイント組七百五十頁
挿繪百五十餘
定價六圓　送料三十錢

○刀劍の比較研究＝歷史と傳系と掟の變遷史

刀劍の語源より始めて刀劍の時代的變遷、鐵の問題、鍛冶の有樣、支那幷に東亞に於ける刀劍との比較等、該博なる例證を以て日本刀劍の成立を說き、更に進んで古刀の實際的調査に及び慶長時代元祿時代並に現今の刀劍鑑定の掟が如何に變遷せるかを說き、古刀新刀の化成、鍛冶の共通重復、本阿彌家に於ける往時の作爲等あらゆる方面より刀劍の性質由來を說きて餘す所なし。然してその根柢には實證鑑定法の觀察あり刀劍上の發見發明書上に滿ち一大文獻をなすもの即ち本書にして刀劍鑑定學上斯くの如き力あり權威ある著述他にあるなし、敢て云ふ本書を讀ますして刀劍鑑定を云ふ勿れ。

清水孝教先生著

刀劍實證鑑定法

刀銘鑿痕及び掟の秘傳たる彫名の見方

（附錄として年代表あり）

菊版特製五五〇頁
口繪十四枚、挿繪百廿個
定價六圓・送料三十錢

刀劍界問題書の現はる!!　造刀法、鑑定法秘傳の現實暴露

京都帝國大學教授小川琢治博士により提唱された刀銘の研究は遂に刀劍鑑定法の革命を來して本書となれり。本書は著者が小川博士と共に刀銘及び彫銘の研究に努力し遂に『世に無銘刀なし名刀隨所にあり』と呼び或は吉堂の號を以て『刀劍逆鑑定』に百發百中の能力を示し全國の新聞又之を紹介し重大なる影響を鑑定界に與へて舊來の鑑定法を根本的に覆すと同時に何人も亦初心者も眞に容易に僞りなく鑑定の道に悟入し得る法を說きたる天下無二の新鑑定書なり。問題の書茲に完成し敢て斯界の批評を乞ふ次第である。

從來秘奧として說かれたるものは嘘なり。

本阿彌光遜先生閲・清水孝教先生著

鑑定秘訣　刀工鐔工辭典

四六版六號活字組六百頁
口繪及別刷挿繪五十枚
挿繪一〇六個
定價六圓・送料卅錢

著者は刀劍趣味鼓吹の先覺者として二十年以前より令名あり、刀劍書の活字本は明治四十年の頃著者に依て初めて世に行はれた、本書は著者が多年の研究に基きて編纂されたるものにして刀劍研究家鑑定家の心得べき要綱を網羅せり、卽鍛冶の沿革其特色、刀劍の部類種別作柄特長、僞作僞名の事、鑑定上の各種要件、鍛ひ方、價格の標準、刀劍の列位等簡にして要を得、一讀直ちに其本位を把握し得べし、加ふるに新古の鍛冶一萬數千人の銘字は悉く擧げて本書にあるを以て鑑刀上唯一無二の指針たるべし、更に諸國鍔工の銘字作風を網羅せるは併せて愛鍔家の史料たるべく刀劍と鍔とを一卷に納めたるは本書を以て嚆矢となすべく、類書中の白眉として刀劍愛好家のみならず正に日本工藝史の一資料をなすものとして推奬す。

文學士 平林松雄先生
法學士 木村一郎先生
法學士 高木雄敏先生 共著

世界名著解題

菊版上製全一册
九ポ活字三段組七五〇頁
定價六圓五十錢
送料三十錢

現代は所謂書物の洪水時代である。一般讀者は何を讀むべきかに逃ひ、唯徒らに誇大巧妙な廣告に惑はされて濫讀に陷り時間と金と精力の絶大なる損失を招ねてゐる。たゞ新しく印刷された滋味多き眞の良書を閑却する幾多の讀者にその反省を促し、その意義を有せぬ書物を多く讀んで先人の遺した名著より一勸めたい。しかし乍ら世界中の名著たのものを一々讀破することは、多忙な我々には到底不可能である。本書は此意味に於いて編著された何百種何萬頁を、我々は一過去の經驗に基き、眞の良書を選擇し、簡潔明瞭に、その要點を摘出し、解説を加へ、現代思想界の全般に亘り、哲學、宗教、教育、社會、經濟、自然科學、精神科學等、和漢洋併せて三百種の名著を網羅した實に世界文化の一大縮圖である。又解説は世上に行はれてゐる單なる概念の記述ではなく、その名著の組織をも解剖し、原書の面影を傳ふることに著者各々絶大なる努力を拂つたものである。

東京高等工藝學校教授 森谷延雄先生著 (忽六版)

これからの室内裝飾

四六版上製八〇〇頁
寫眞・凸版三五〇圖
アート別刷六十九頁
定價五圓五十錢
送料三十錢

玄關から臺所まで、どこをどう裝飾し設計したらよいかと云ふ事は一般文化人の常識として知らねばならぬ事であるにもかゝはらず、あまり世人は之に注意を拂はないやうに見へる。尤も之れにはいゝ參考書のないと云ふ事も一つの理由となる。本書はこうした意味から一般向を目的として、興味ある筆を以て多數の挿繪と共に書いたものではあるが、同時にまた專門家をも益する事の多い書物であることを保證する。著者は現代に於ける裝飾美術界の代表的權威者であつて本書は著者の大なる努力に依つて成れるもので、私選への最も貴い贈物である。

目次—室内裝飾に就て—玄關—廣間と階段室—應接室と客室—居間又は居間兼客室—食堂寢室と化粧室—臺所、食器室と朝餉場—浴室と便所—子供室、ヂオ兼喫煙室—書齋—夫人室、ヂ戯室、音樂室、其他の室々—建物に屬する各部—敷物と裝飾用織物—裂地—壁紙窓飾及入口飾—色彩—家具の配置、椅子、卓子、塗工—電燈と照明—煖房

畑中健三先生著

名橋巡ぐり

四六版美裝三五〇頁
口繪六枚、寫眞八十圖
價二、五〇 送料一八

古來我國の橋梁は地勢氣候及材料等の關係上家屋などと同樣木材を以つて唯一の材料とし其の構造も極めて質朴なものであつたが其清楚なる外觀はよく環境と調和し瀟洒たる風景と相俟つて幾多の詩人に其の美を歌はれ又繪畫ともなつた、然るに時運の推移は古來の名橋を今日の如くどし〳〵歐米式の鐵橋に、石橋に驚くべき變化を來らしめつゝある。即ち本書は我國古今の名橋は元より世界各國の名橋、奇橋珍橋を聚錄し、しかも趣味と實益とを兼ねしむる爲め古きは詩歌傳説を始め、最近架設せるものに於ては其の設計上の參考資料を始め挿話等をも揭げ、加ふるに多數の寫眞に依つて一層興味溢るゝ讀物としたものである。

横山信先生・高橋仁先生・合著

日本建築年表

附錄、保護建造物綜覽及其寫眞

四六版 上製箱入
本文三百頁寫眞九十四圖
定價三、〇〇 送料二〇

本書は從來この種刊本の絶無にして本邦建築史上の年代を檢索するにあたり常に不便を感ずる所より、聊かその缺を補んとして纂修せるもの即ち、本朝紀元以來二千五百八十二年に至るまでの主要建築物並にこれに關する主要事項を本文として成れるものである。尙ほ特別保護建造物一覽並に詳細なる二種の索引を附したれば總て一目瞭然、更に卷頭に特別保護建造物寫眞九十四圖を揭げて參考に供せるものである。

42.

東京高等工藝學校
教授　宮下孝雄先生著

色彩の知識

四六版　三七〇頁
口繪・原色版一枚、石版六枚
挿繪・寫眞及凸版七十個
定價　參圓　送料二十二錢

最近色彩學應用の知識は、日常生活の基調としては勿論、或は軍事上に、或は一般科學に最も有用な根柢となるに至つた。本書は著者が數年來**特に應用を主とした實際的方面に關する色彩研究の結果**、從來の難解に偏した點から脱却して、最も新らしく、平易に趣味的に、眞摯に圖解を與へて所謂手にとるやうに色彩各方面を詳述したものである。著者は色彩學に就て理論と實際との系統的研究者として斯界の權威者である。

東京高等工藝學校
教授　宮下孝雄先生著

裝飾構成の研究

菊版上製四百八十頁
アート別刷挿繪卅枚
寫眞及凸版三五〇餘
定價五圓　送料・三十錢

線や形の研究が造形藝術の裝飾として構成される場合に、その要素は如何に取扱はなければならないか。樣樣はどう組立てたらばよいか。此等の點を純正圖案學の立場から系統的に然かも平易に論述し、更に實際製作の應用的方面にまで敷衍した事は未だ誰人も手をつけられないと同時に當然知らなければならない必要の諸點を充實したものが本書の要旨である。しかも卷中近代構成法理論を力說した點は慥かに工藝美術家、實驗心理學者、美術教育家に對して好參考資源たることを信じ廣く斯界に薦むるものである。